



松 添 貝 塚

発 掘 調 査 報 告 書

宮崎市文化財調査報告書

第 2 集

1 9 7 4

宮 崎 市 教 育 委 員 会

正 誤 表

ページ	行	誤	正
18	No. 9	(ナガレコ)	(ナガラメ)
		
"	No. 10	Notohaliotis	Euhaliotis
"	No. 12	カノユガイ	カノコガイ
"	No. 12 13	あますぶね科	あまおぶね科
"	No. 13	Theiostyra	Theiostyla
"	No. 15 No. 16	Patamidibae	Potamididae
"	No. 17	Koihi	Kochi
"	No. 19	マキガイ	マガキガイ
"	No. 37	subcrenatus	subcrenata
"	No. 44	scrietus (GovLD)	gouldi (CONRAD)
"	陸産貝類		
	No. 2	sufa	rufa
図版	図版 (3) B区	貝石状態	B区 貝層状態
"	図版 (4) B区	土 層	D区 土 層
"	図版 (15)	土器底部及び土碓	土器底部及び土錘
"	図版 (17)	石 碓	石 錘
"	図版 (19)	鹿角製ペアピン	鹿角製ヘアピン
巻末	宮崎市教育委員会教育課	宮崎市教育委員会 社会教育課	

は じ め に

近年開発の波が各地に押寄せており、埋蔵文化財、記念物の保存には苦慮いたしています。

本市では、昭和48年3月に発刊いたしました、石神遺跡発掘調査報告書に続き、第2集として本書を発刊することができました。

本市中央部及び周辺には、柏田貝塚、跡江貝塚、花見貝塚といった縄文時代早期、前期の貝塚がありましたが、これらは既に破壊されてしまい、その姿をとどめていない現状です。また市内南部においては、納屋向貝塚、松添貝塚といった縄文晩期の貝塚があり、前者は宅造のため破壊され、松添貝塚のみが現存しております。

しかしながら、松添貝塚は観光地青島に近接しており、近年、ホテル、保養所及び観光施設の建設によって、破壊される恐れが生じています。それで松添貝塚についてしっかりした規模、性格、範囲をつかみ、今後の貝塚保存への基礎資料を作成するため、学術調査を実施いたしました。

調査員の方々には、調査及び原稿執筆にあたりまして、ご多忙中にもかかわらずご苦労いただきましたことを心からお礼申し上げます。

また、発掘調査に際しまして、土地の所有者の方々には、快よく土地を提供していただきましたことを深く感謝いたします。

本調査報告書が関係各位の参考となれば幸いです。

昭和49年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田 中 栄

例 言

- 1 本書は、宮崎市教育委員会が昭和47年12月18日から12月27日まで実施した青島松添貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査には、石川恒太郎、鈴木重治、安楽勉があたり、資料整理には、別府大学生松井孝之、平之内幸治が協力して行った。
- 3 本文の執筆者の氏名は目次に明記した。
- 4 出土人骨については、新潟大学医学部小片保教授に寄稿をいただいた。
- 5 原稿執筆の段階で十分討論をもつ時間がなく、用語の統一を欠いた点がある。
- 6 挿図の作成及び写真撮影は、野間重孝があたった。
- 7 本書の編集は、鈴木重治と野間重孝があたった。
- 8 本書における図版の一部に、昭和37年度別府大学、宮崎高等学校による調査時の資料を提供いただいた。
- 9 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会に保管している。

昭和49年3月

宮崎市教育委員会

本 文 目 次

第1章	自然環境と周辺の遺跡……………	(鈴木重治)	1
第2章	松添貝塚の発掘と研究史……………	(〃)	3
第3章	遺 跡……………		4
第1節	包含層の状態……………	(鈴木重治)	4
第2節	主要な遺構……………	(〃)	8
第4章	遺 物……………		9
第1節	文化遺物……………	(鈴木重治)	9
土器及び土製品……………	(〃)	9	
石器及び石製品……………	(〃)	13	
骨角器……………	(〃)	17	
貝製品……………	(〃)	17	
第2節	自然遺物……………	(〃)	18
貝 類……………	(〃)	18	
獣 類……………	(〃)	19	
魚 類……………	(〃)	19	
第5章	人 骨……………	(小片 保)	19
第6章	考 察……………	(鈴木重治)	22
	結 言……………	(石川恒太郎)	23

挿 図 目 次

第 1 図	松添貝塚位置図	2
第 2 図	松添貝塚地形図	4
第 3 図	土 層 図	5
第 4 図	A区出土状況	6
第 5 図	B区出土状況	6
第 6 図	C区包含層中、上部出土状況	7
第 7 図	C区包含層中、下部出土状況	7
第 8 図	B区出土、石蓋土壙	8
第 9 図	出土の土器	10
第 10 図	出土の土器	11
第 11 図	出土の土器折影	12
第 12 図	石鏃、スクレパー、石匙、垂玉、石斧	14
第 13 図	石錘、凹石	15
第 14 図	尖頭状礫器、サイドスクレパー、磨石	16
第 15 図	貝輪、骨針、貝刃器	17
表 1	松添貝塚出土貝類一覧表	18

図 版 目 次

図版 1	遺 跡 遠 景
図版 2	A、B区の発掘風景
図版 3	貝 層 状 態
図版 4	D 区 土 層
図版 5	埋葬状態で出土した犬
図版 6	B区検出石蓋土壙
図版 7	A区土器の出土状況
図版 8	C区包含層上面の出土状況
図版 9	鯨骨の出土状況
図版 10	鯨骨の出土状況
図版 11	出 土 の 土 器
図版 12	出 土 の 土 器
図版 13	出 土 の 土 器
図版 14	出 土 の 土 器
図版 15	土器底部及び土錘
図版 16	石鏃、石匙、スクレパー、垂玉
図版 17	石錘、石斧、尖頭状礫器、凹石
図版 18	出土の貝類及び貝刃器
図版 19	鹿角製ヘヤピン、骨ペラ、骨針及び貝輪
図版 20	犬、イノシシ、鹿及び犬の糞石
図版 21	出 土 人 骨

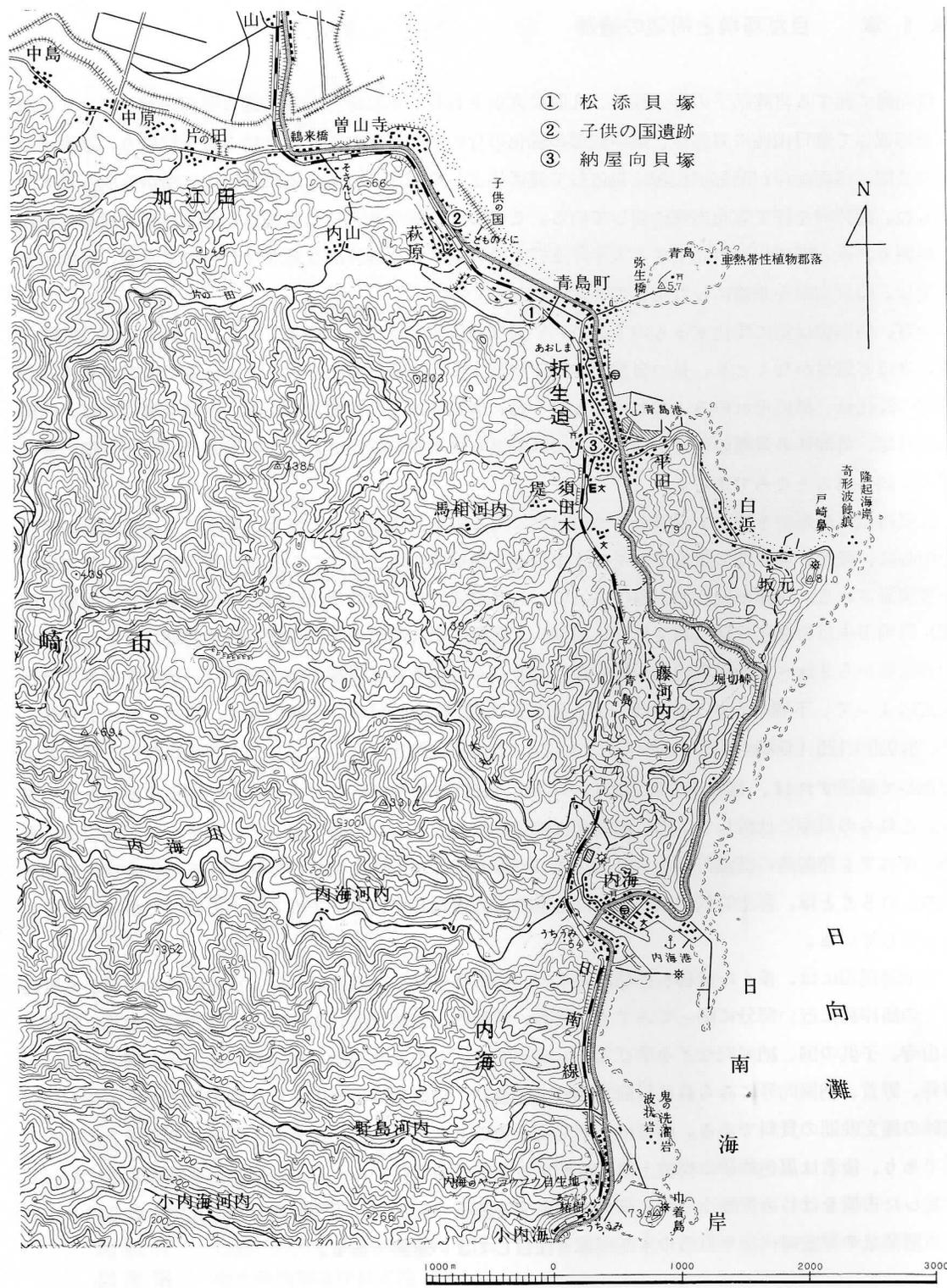
第 1 章 自然環境と周辺の遺跡

日向灘に面する宮崎県下の海岸線は、3区に大別される。県北部の国定公園日豊海岸がリアス式の海岸を形成して豊日山塊に対応し、県中央部の変化のない長く平坦な海岸が宮崎平野を縁取り、県南部の国定公園、日南海岸が南那珂山塊に対応して波状岩として知られる砂岩と泥板岩の互層から成る岩床を連らね、都井岬を経て志布志湾に面している。このような海岸線を持つ宮崎は、北及び西を遠く九州山脈が囲り、東と南に黒潮の北上する太平洋を控えている。この地理的な環境は、そのまま動、植物相を規定し、照葉樹林を基盤にした地域性をよく示している。

一方、海岸線は常に変化するものであり、いまなお生物のようにたゆまず変化している。短期間では、さほど気付かなくとも、長い自然史の中で観察すると、その変化の大きさには驚くものがある。海岸線の変化は、単にそれのみにおわることなく動、植物に大きな影響を与える。一例を挙げれば、内湾性の貝塚、外海性の貝塚の差はあってもすでに絶滅した貝類が検出される。石器時代貝塚の貝種の変化はよく知られるところである。

先史時代の海岸線を想定する場合1つの目安になるのが貝塚である。結氷、解氷による海水面の変化を中心に、隆起、沈降等の諸現象がそのまま海進、海退を生み出す。この変化は鹹水産貝塚の分布によって実証される。宮崎市近辺の貝塚によって、これをみれば、宮崎市瓜生野の柏田貝塚（縄文早期、前期）宮崎市生目の跡江貝塚（縄文早期、前期）、東諸県郡高岡町の花見貝塚（縄文前期）などは、現在の海岸線から9km～10km程の内陸に位置している。このうち跡江貝塚の絶対年代は、放射性炭素の年代測定によって、下層のシジミからB、P、9,100±170(Gak4,414)、上層のカキ、貝ハイガイからB、P、6,990±125(Gak4,415)が知られている。この年代測定に従って、しかも花見貝塚の土器形式と対比して総括すれば、宮崎市の周辺においては、7,000年前を海進のピークの1時期とすることが出来る。これらの貝塚に比較して、当松添貝塚は海退期に形成された遺跡であって、はるかに現海岸線に近い。それでも発掘時の満潮汀線から計測して、最短距離300m前後に位置している。その後も徐々に海退がみられることは、弥生時代中期の土器片を現海岸に近接しているク子供の国クの園内で採集出来ることが示している。

当遺跡周辺には、多くの遺跡が確認出来るが、特に弥生時代の遺跡が多い。宮崎市の中心部から青島までの海岸線に近い部分に限ってみても、曾井、津和田、宮崎空港、本郷南方、郡司分、木花、野首、曾山寺、子供の国、納屋向などを挙げる事が出来る。このうち松添貝塚の資料と関係の深いものは、曾井、野首、納屋向等にみられた貝殻文系の土器及び、宮崎空港より出土した突帯上に刻目を持つ粗製深鉢の縄文晩期の資料である。前者は、南九州土着の土器であって、市来式、草野式の系譜上にある1群であり、後者は黒色磨研の精製土器に後続する夜臼式の資料である。この他、当遺跡の北面にかけて存在した古墳をはじめ宮崎市の南部郊外に散在する若干の古墳や、平安時代前半に比定される松ヶ迫の須恵器窯址や平安時代後半以降の木花経塚も注目してよい遺跡である。



第1図 松添貝塚位置図

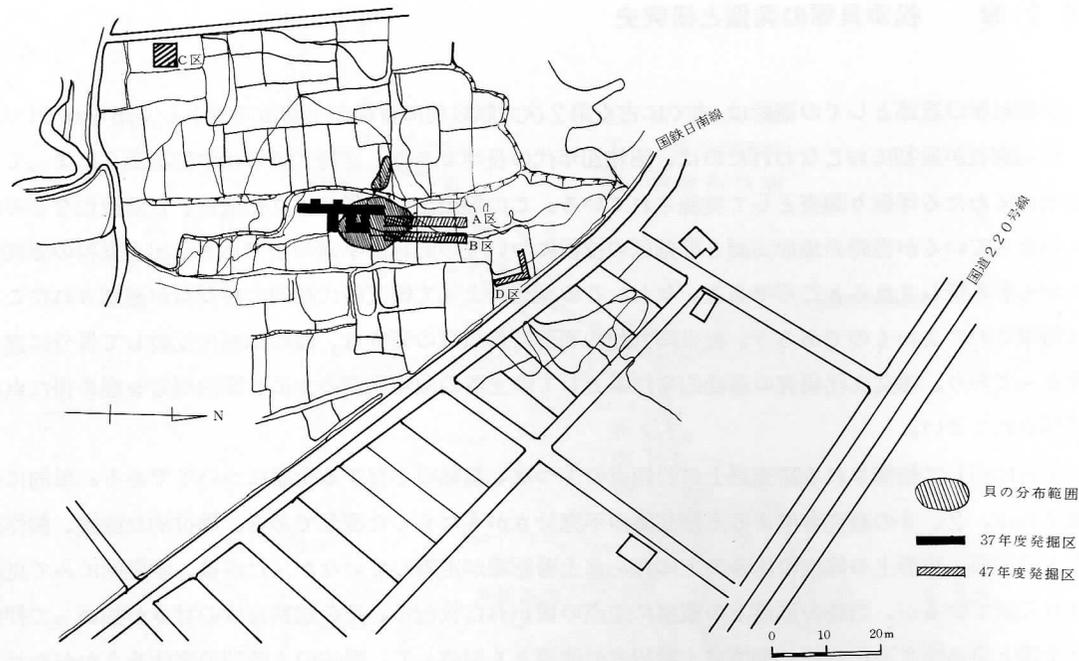
第2章 松添貝塚の発掘と研究史

松添貝塚の遺跡としての確認は、すでに古く第2次大戦以前に青島の土器散布地として知られていた。発掘調査が最初におこなわれたのは、昭和20年代の後半であり、宮崎大学の田中熊雄氏らによって、数地点にわたる坪掘り調査として実施されている。この際出土した資料は文化遺物、自然遺物など多岐にわたっているが当時の地形実測と発掘区の位置についての記録が不備の由であり、出土資料の重要性にかんがみ惜しまれるところである。なお、この調査によって縄文時代晩期の好資料が確認されたことは特筆されてよいものであろう。従来南九州の石器時代貝塚の研究は、他の地域に比較して多分に遅れをとっており、縄文文化研究の基礎的な作業としての土器の編年研究の上に、空白部分を埋め得た点は評価されてよい。

土器に関して指摘される研究史上の問題点の1つは、組織痕を有する土器についてである。単的に指摘すれば、2、3の研究者による土器認識の不充分さがもたらした混乱である。層位的な観察、製作技術上の観察、形態上の観察の総合の上になった土器認識が定着していなかった点は、学史的にみて克服されて来ているが、当時の形態上の観察に主点の置かれた状況に、その観察自体の甘さが加わって押型文土器と見あやまった点は、押型文土器研究の変遷とも関連して、過去の1時期の実体をうかがわせている。すなわち九州の押型文土器中には、後晩期に属するものがあるとする見解が当時まで残存していたことを示している。その後の研究の成果は、九州押型文土器も特異な様相を持つものではなく、後晩期まで系譜を見出すことの出来ない点をあきらかにしていることは、すでに周知の事実となっている。

昭和30年代に入ると縄文文化の研究は、全国的にその起源の研究と終末期の研究に重点が置かれると共に各地における編年研究の整理が進んだ。特に九州においては、芹沢長介、鎌木義昌らによる長崎県福井洞穴の調査をはじめとする後期旧石器時代の研究と土器起源の問題についての研究の進展には見るべきものがある。また西北九州における縄文後晩期の調査は、筏遺跡、山ノ寺遺跡、原山遺跡等によって代表される成果として知られる。この後者の研究は、九州各地に大きな影響を与え、当松添遺跡の研究にも1つの課題を提供し、賀川光夫を中心とした筆者らによる昭和37年度の発掘調査を生むに至った。その年の発掘調査は当松添貝塚の研究史上、重要な意味を持つものであり、特に層位的な観察と、出土人骨の観察に画期的なものがあつた。層位的な観察によって得たものは、縄文後期終末に位置する西平Ⅱ式が下層に検出され、上層に縄文晩期前半の一群の資料を確認し得た点である。この晩期の一群は、南九州における貝殻文系土器の終末と黒色磨研精製土器の共伴関係の確認であり、当松添貝塚を標式とする松添式の設定を可能とし、南九州における縄文文化の編年上に一定の資料を提供し得たことは、その後の研究によって明らかとなる。このことは、納屋向遺跡の発掘調査によって実証されたところである。

以上の研究史をふまえて、宮崎市教育委員会の主催する発掘調査が昭和47年度に実施されることとなった。この調査の端緒は、青島周辺の開発の急展にあり、観光開発に関連して遺跡周辺の土地利用が、地から他に転化する恐れが十分に予想された点にあつたことは、誰しも認めるところであろう。以下に示すところは、本調査を中心に従来の成果の一部を括めるものであり、南九州における石器時代貝塚の研究に意のあるところとなろう。



第2図 松添貝塚地形図

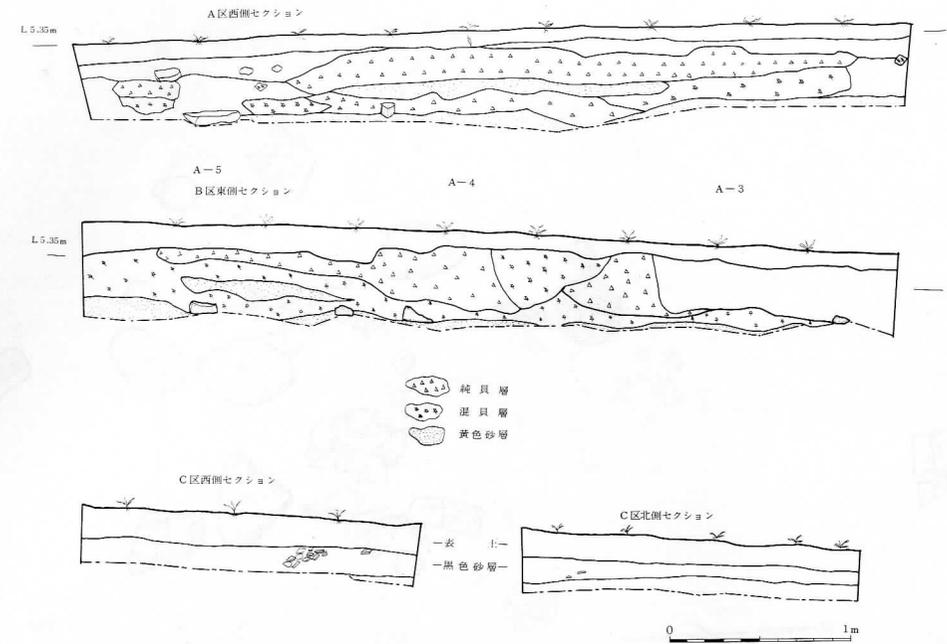
第3章 遺跡

第1節 包含の状態

松添貝塚の名称は、縄文時代の貝塚をもった本遺跡の総称として使われているが、貝塚それ自体の規模は、貝層の分布が示す通り、東西約12m、南北約18mの長楕円形の地域に限定されているのであって、この地域を含めて地表に散布する土器片、石器片の拡がりや東西約180m、南北約200mに及んでいることからすれば貝塚を含めて、その全体を松添遺跡と呼称に従って置くことにする。遺物散布の状況は、南西部のブロックと北東部のブロックの2ヶ所を中心にみられるものの、さきに触れた規模で全般的に散在する。

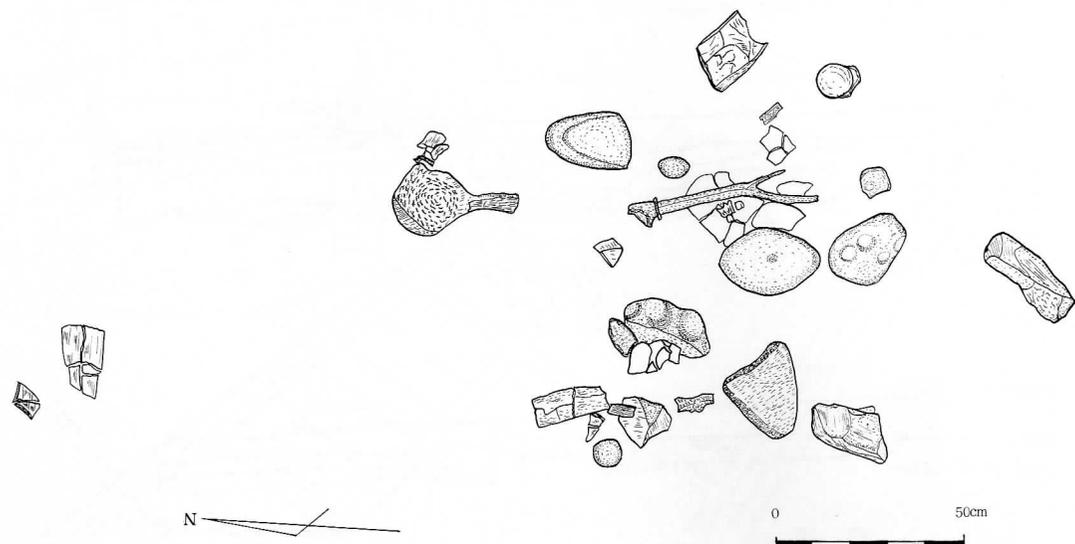
広範囲から採集される資料によれば、全体として後、晩期の遺跡と云えるが、地域によって若干の差が認められる。このことは、黒色磨研の精製土器の有無として確認されるのであって、遺跡の東北部に寄って、より長期間にわたる遺物が採集されたことを意味する。このような遺跡内部の地点差は、発掘調査によっても実証されたところである。

遺跡は、南北に走る規模の小さい海岸砂丘上に位置しており、その西側は、畑地→水田→低湿地を見、蛇行して東北流する知福川を控える。北及び南側に低丘陵が迫り、東側には、国鉄日南線及び国道220号線を挟んで、青島一子供の国の海岸線を持つが、この間の沖積地は、畑地から宅地への転用が順に進んでいる。なお、遺跡近辺の標高は、6m前後を実測するが、貝層の最上面では5.15mの絶対高を示している。

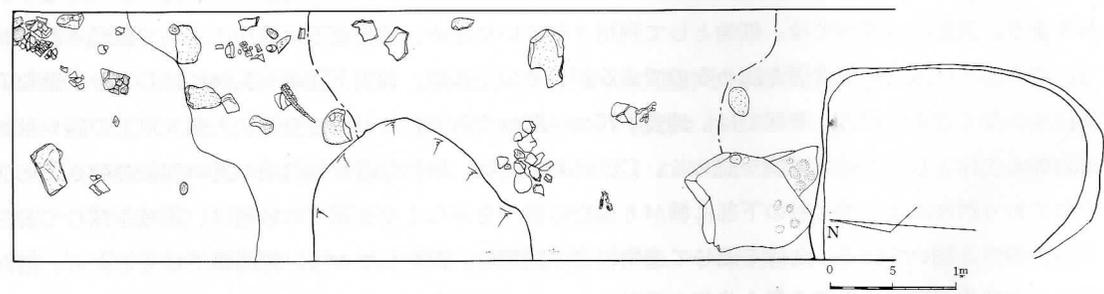


第3図 土層図

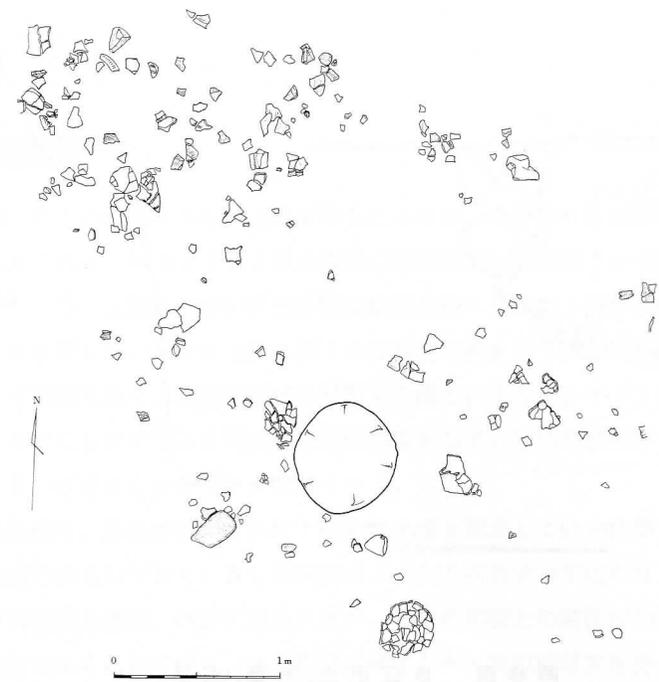
遺物の包含は、貝層を持つ地点A、B区と貝層を持たない地点とでは、大きな違いをみせている。貝層を持つ地点では、多量の自然遺物が包含されているが、貝層を持たない地点では、発掘区に関するかぎり、自然遺物の検出はない。自然遺物の有無にかかわらず、文化層の層位的な区分を確認した貝層を持つ地点と単一の文化層のみを包含した貝層を持たない地点の差は重要である。貝層を持つ地点の下層の資料は貝層を持たない地点の単一の文化層に相当するのであって、上層の資料に相当する文化層は、貝層を持たない地点の発掘区に関するかぎり検出されていない。貝層は、純貝層と破砕貝層に区分されるが、安定した状態で検出された純貝層は、砂層から成る間層を挟んで、2枚に区分され、破砕貝層の上面に対応する間層を形成した砂層の上面は角礫や円礫を同一レベルに安定して出土するところから、一時期の生活面を想定するのに充分である。このことは図示したA区西側の断面図によってもうかがえよう。発掘区のすべては、畑地として利用されていたため、地表直下は耕作によって攪乱されており、その直下に遺物の包含層を認めるのであるが、その上面は、地表下20cm~30cmにはじまり、遺物の検出をみなくなるのはA、B区では、地表下70cm~80cmであり、この面で全体に人頭大以上の礫や単純な白砂を主体として海岸堆積物を認める。C区においては、単純な遺物包含層が20cm前後の厚さで形成されており耕作による攪乱層の下部に擴がり遺物の検出をみなくなる面での砂層は、黒味を減じて黄白色の砂層へと続いている。全体を通じて遺物包含の状態は、安定しており、宮崎県下はもとより、南九州の縄文時代遺跡のうちでも最も良好な遺跡の1つといえよう。



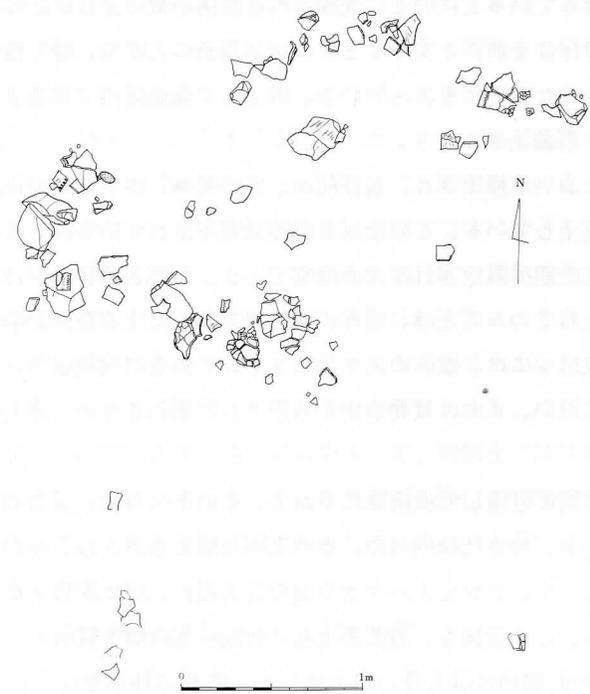
第4图 A区出土状况



第5图 B区出土状况



第6图 C区包含层中、上部出土状况



第7图 C区包含层中、下部出土状况

第4章 遺物

第1節 文化遺物

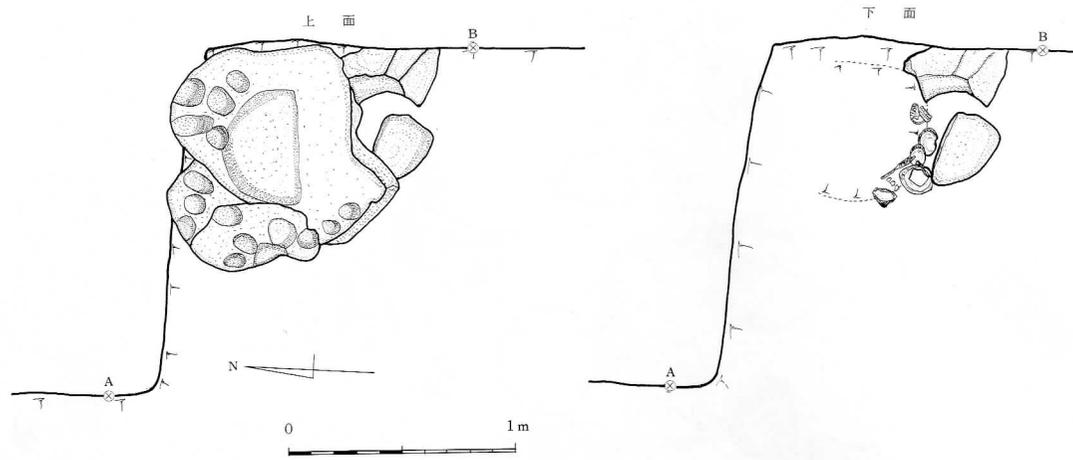
土器及び土製品 出土の土器のうち、主体をなしたものは、形態的には深鉢形土器と浅鉢形土器であり、施文と整形よりみれば、貝殻文土器と黒色磨研の精製土器が特徴的である。

A・B両区においては、上層の一群が黒色磨研の精製土器に貝殻文土器が共伴し、下層になると黒色磨研の精製土器が姿を消して、貝殻文土器に若干の沈線文土器を伴う状態で出土している。C区においては、文化層として確認された土器群は単純に貝殻文土器といえるが、その下部に数例の沈線文土器が検出されており、このことがそのまま層位的な前後関係として、黒色磨研精製土器→貝殻文土器→沈線文土器の順で古くさかのぼることをうかがわせている。

黒色磨研の精製土器は、単純に分離された1枚の文化層を形成している状態での検出はなく、貝殻文土器に伴出する状態で出土しており、A、B両区の発掘区内のすべてにわたってそのことが確認される。出土の黒色磨研精製土器は、浅鉢に限られるが、若干の形態上の変化が指摘される。この変化は口縁部の整形に集中的にあらわれている。また肩部に蝶ネクタイ状の貼付文を持つ資料は、やや深みのある浅鉢であって波状口縁を持つ点でも他と区別される。

貝殻文土器は、深浅形土器に限られ、口縁に平行する一段または二段の貝殻腹縁による押圧列を持つ点に斉一性がみられる。貝殻圧痕として確認される施文の上下を細い沈線で区画する例や、圧痕列の下端に一本の沈線を持つ例があるが、すべて同趣の貝殻条痕を施文する点でも共通しており、一括して扱うことが出来る。器形は単純な深鉢といえるが、胴部から口縁に直行している例や貝殻列のみみられる位置をややくぼめて肩部としている例があるが、ともに口縁部は単純であって、肥厚する例や、またく字形に屈折する資料は出土していない。底部も平底に限られている。貝殻条痕のみがみられる土器も多量に出土しているが、器形の変化に特異な例はない。貝殻条痕を胴部以上にもつ資料のうち胴部以下丸底の底部に至るまでの全面に組織痕を有する資料がある。組織痕自体に若干の変化があり、布状に近い組織の細い例や、網目状に粗い資料にわけることが出来る。網目状の資料のうち、網目が深く押圧されている資料が、かつて押型土器と混同された資料である。回転押型による施文でないことは、回転による施文の繰り返しがすべての部分に確認されないことであきらかである。以上の土器は晩期に屈する資料で、これらの共伴関係を一括して松添式として扱うのを妥当とする。沈線文を有する土器は、く字形口縁で肩部までがすぼまり、胴部が丸味を持つ資料であって、肩部までに沈線文を施している。沈線文は、口縁に平行する一本と、首部にめぐらした2本の沈線間を縦位の短沈線で埋めることによって構成されている。また沈線中に数個の刺突を施す例もみられる。これらの資料は、後期終末に位置するものであり、西平Ⅱ式に比定される。

土製品は土器片利用の土錘が数例出土したのにとどまっている。



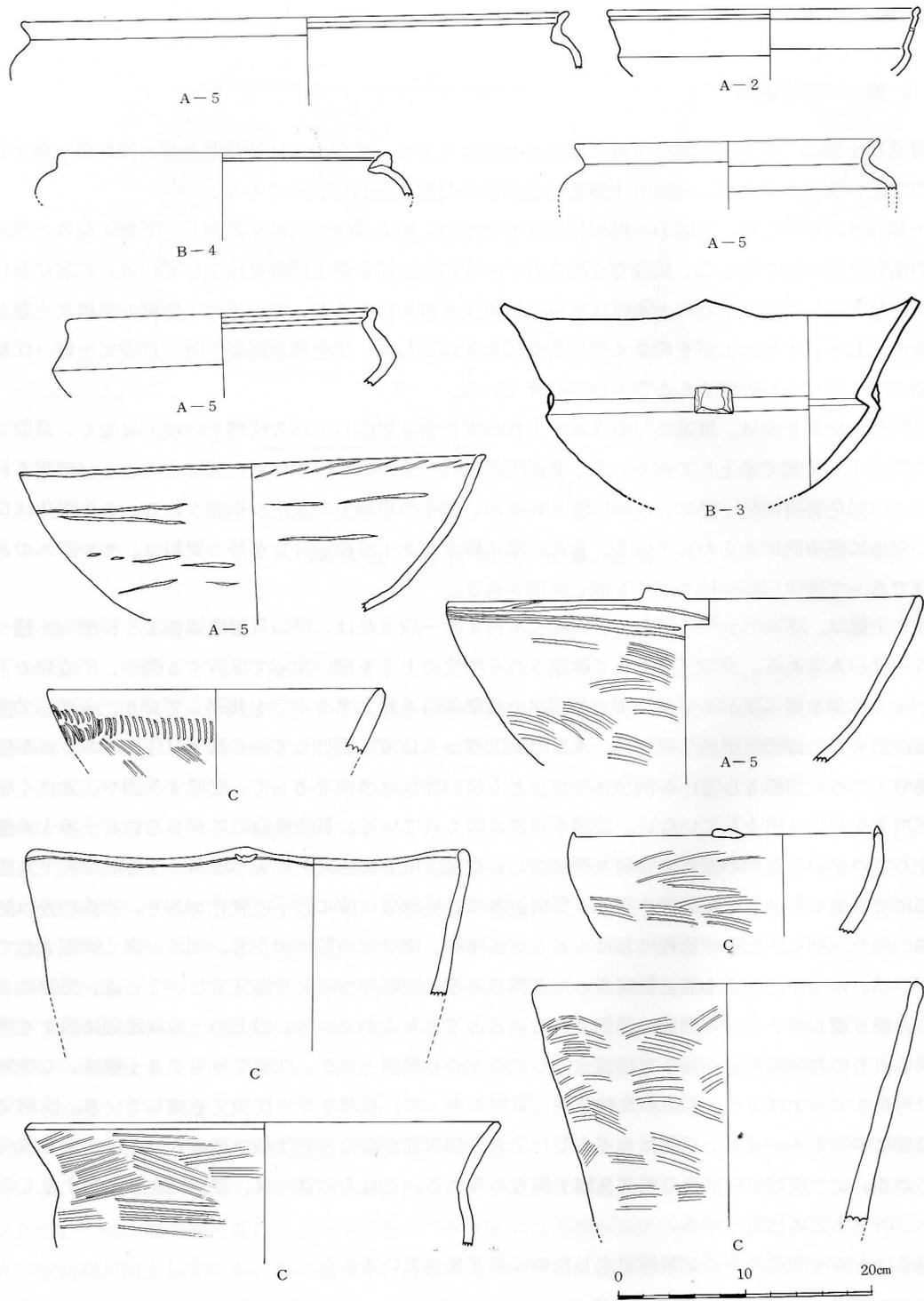
第8図 B区出土、石蓋、土壌

第2節 主要な遺構

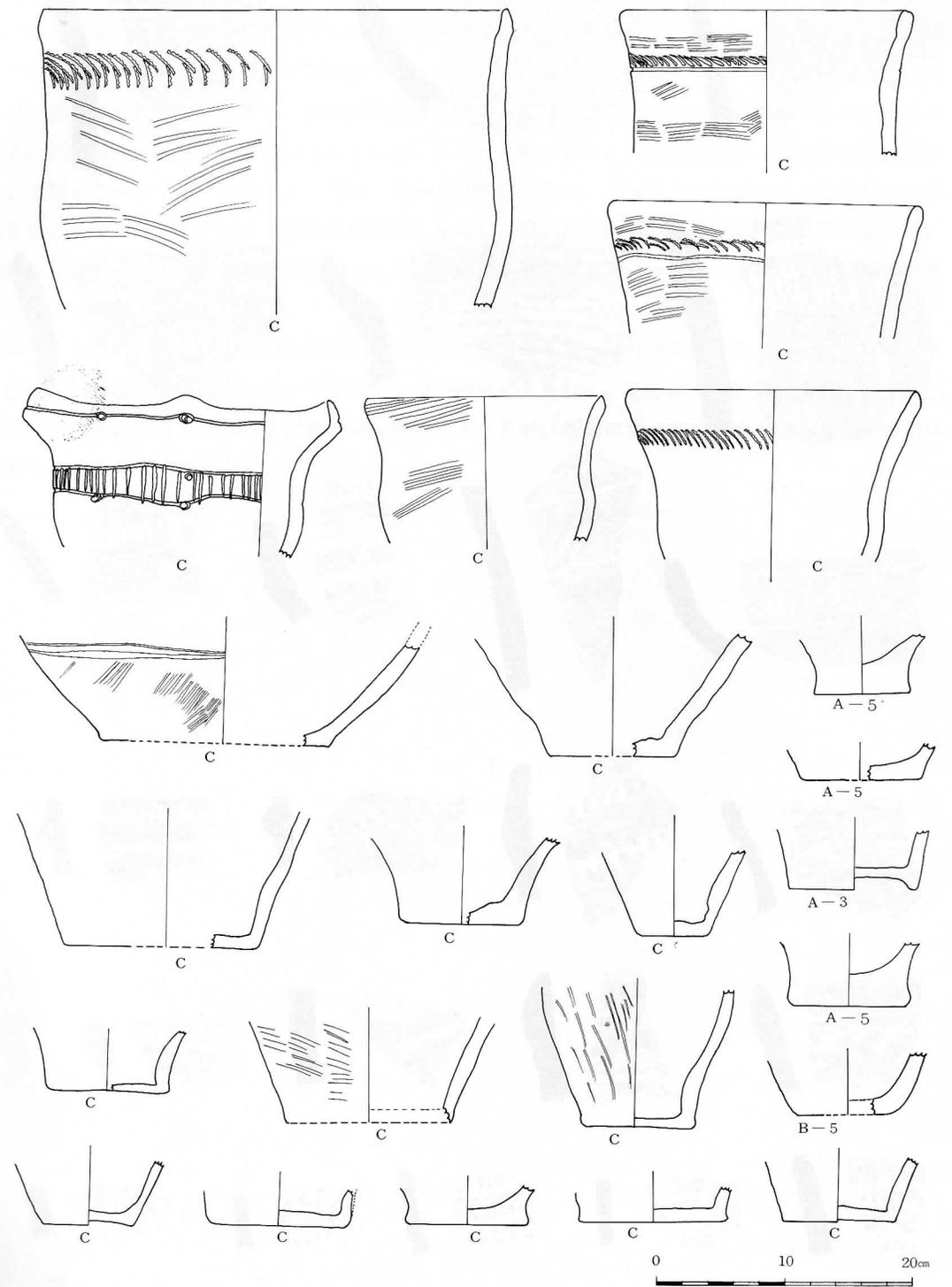
良好な遺物包含層を検出しているとはいえ、完掘された遺構の数は少ない。このことは、47年度の発掘調査においても、遺跡の保存を前提とすることで、確認調査にとどめ、極力後世に遺物を残す配慮をし、発掘区の拡大をしなかったことにもよっている。限定した発掘区内で確認された遺構のうち重要なものは、犬の埋葬遺構と、石蓋土壌である。

犬の埋葬遺構は、B区において検出され、長径60cm、短径40cm、中央部での深さ20cm程の土壌に一体の犬が埋葬された状態で出土している。この土壌の周囲は若干乱れているが、その掘り方の面は、晩期の包含層中であって、縄文晩期に限定される犬の埋葬である。頭部と大腿骨がほぼ同一レベルにあって脊椎などが若干下位に出土していることは、埋葬の目的で掘られた土壌自体が中凹みであったことに対応している。なお出土の獣骨中には、数体の犬を認めるが、これらの資料は散在する状態で出土しており埋葬の状態はあきらかでない。まれに貝層の中から出土した糞石もその形態上の観察から犬の糞であることはあきらかである。

石蓋土壌は、犬の埋葬遺構に近接して検出されており、このあたりは、貝層の曠がりの端線に位置している。長径70cm、短径50cm、厚さ15cm内外の、やや扁平な砂岩を蓋とし、その直下に浅い土壌が確認された。この土壌の線に接して、アワビとハマグリ製の貝刃器が弧状に配置され、更にその外線に人頭大の砂岩礫が出土している。この遺構も、石蓋の上面に晩期の包含層を認めたことによって、その時期の下限が限定される。なお土壌中には人骨の出土はなく、遺構の性格を決定するのは困難である。なお、この他の遺構は、部分的なものであって特定することは出来ない。図示したC区の出土状況によっても50cm内外の直径をもったピットがあるが、その性格についても将来の調査に期待する以外にない。



第9図 出土の土器



第10図 出土の土器

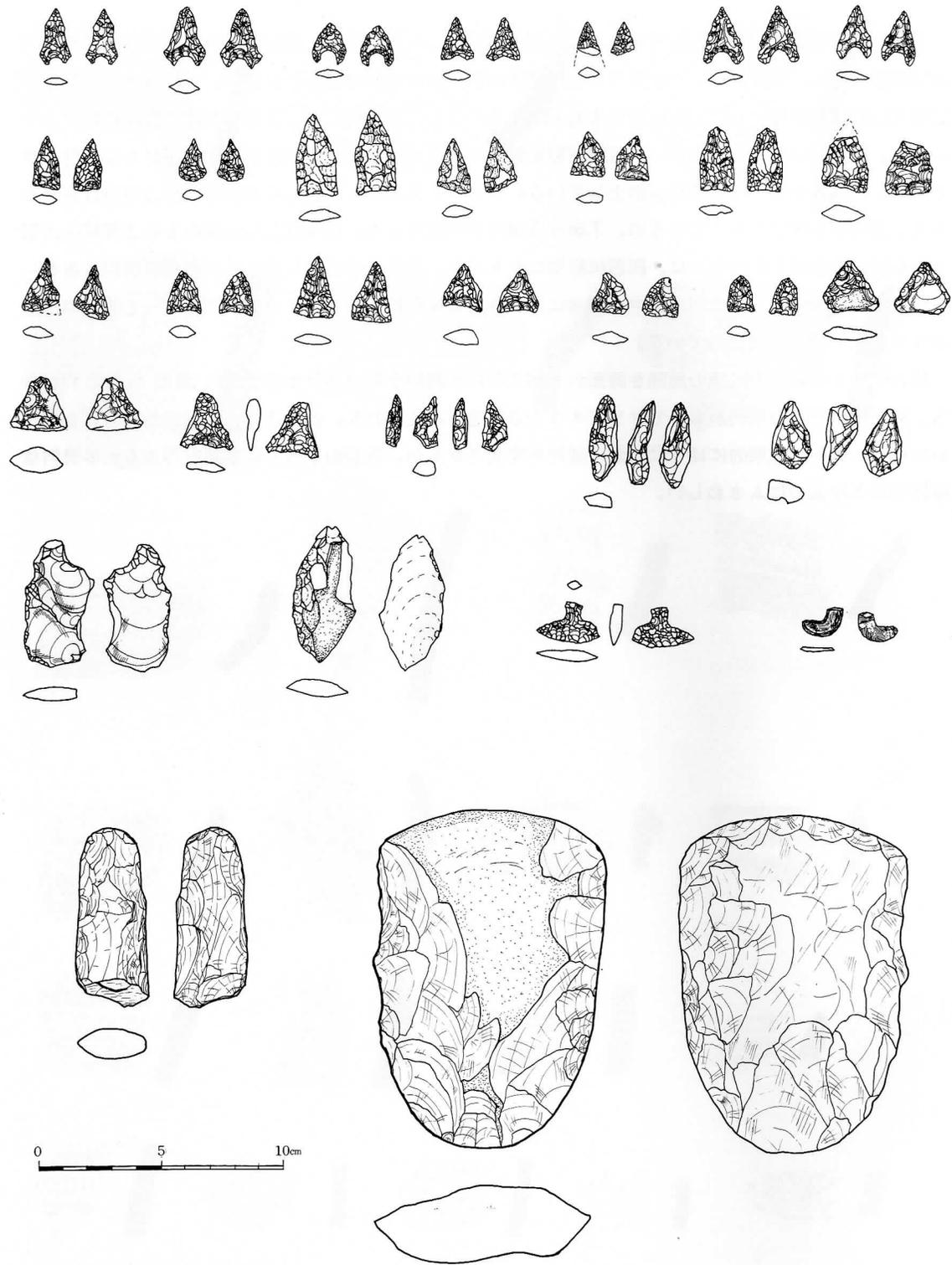


第11図 出土の土器折影

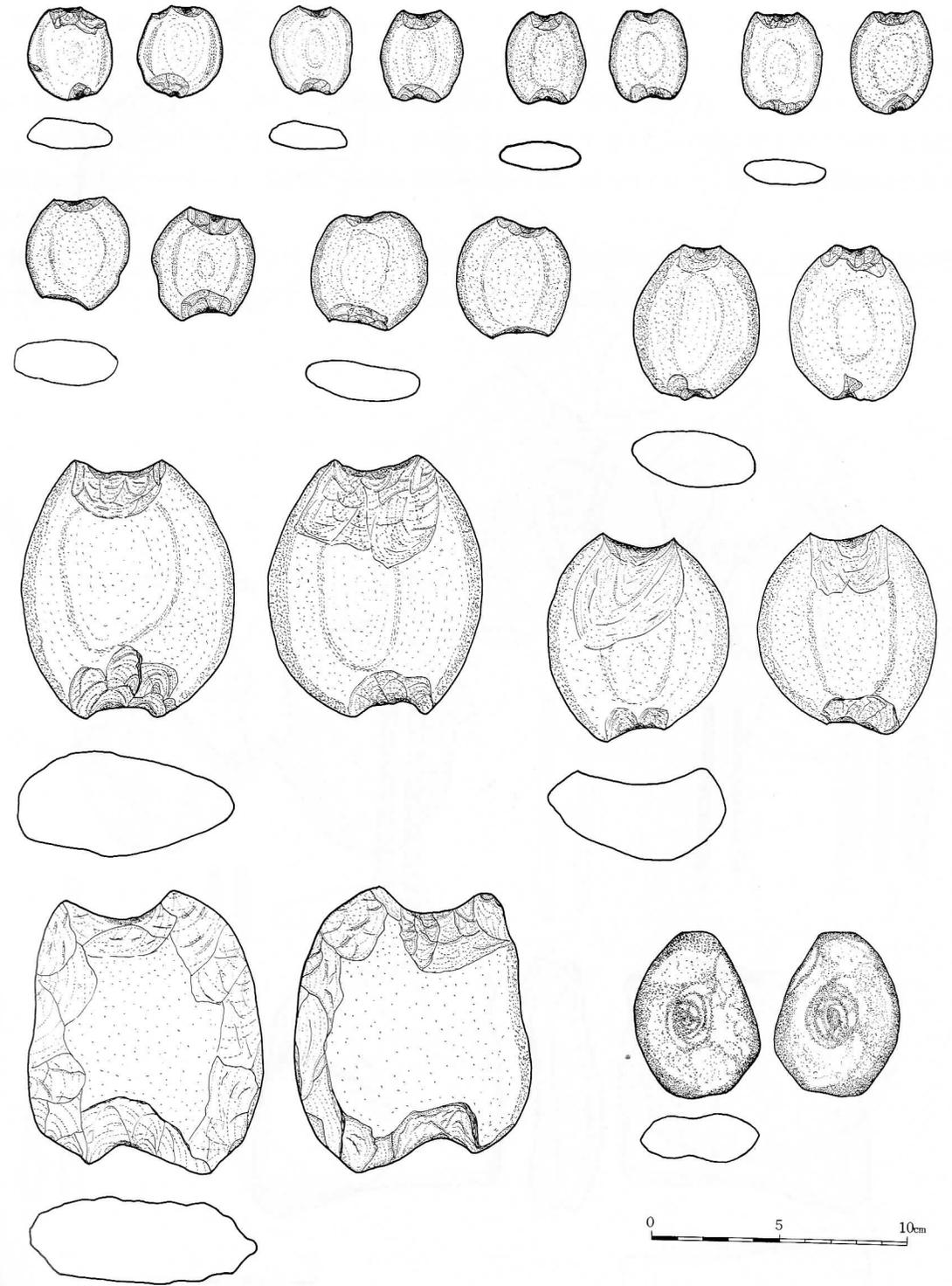
石器及び石製品 出土の石器には、石斧、石鎌、石匙、石錘、凹石、磨石、使用痕のある剝片及び尖頭状礫器がある。石斧には、打製石斧と局部磨製の石斧があるが打製石斧が多い。石鎌はチャート及び黒曜石製の資料が多いが頁岩製の資料も若干出土している。形態的には、図示した通り多岐にわたっているが、概して小型のものが多い。黒曜石製の資料のうちには、姫島産黒曜石を使用したものが含まれている。石匙は小型の横型資料が出土している。チャート製である。出土の石器のうち大部分は石錘であり、長軸が5cm以下の小型のもの、7cm～8cm大の中型のもの、10cm以上の大型のもの3種類に大別されるが、大型のものの中には、凹石に転用したものか、凹石から転用したものか両用の資料がある。頁岩質の石材を素材とした剝片の中に側縁に刃部を認める資料があり、サイドスクレパーと同様の用途のうかがえる資料も出土している。

厚みのある砂岩質の円礫の周囲を両面から加工した石器のうち一部分を尖頭状に調整した資料がある。漁業用の石器の類例からしてアワビオコシの用途が考えられる。石器には、蛇紋岩及び滑石を使用した垂玉がある。形態的には、次状耳飾の破片を考えさせるが、周縁のすべてに研磨痕のみられる資料は原始勾玉と呼ぶのにふさわしい。

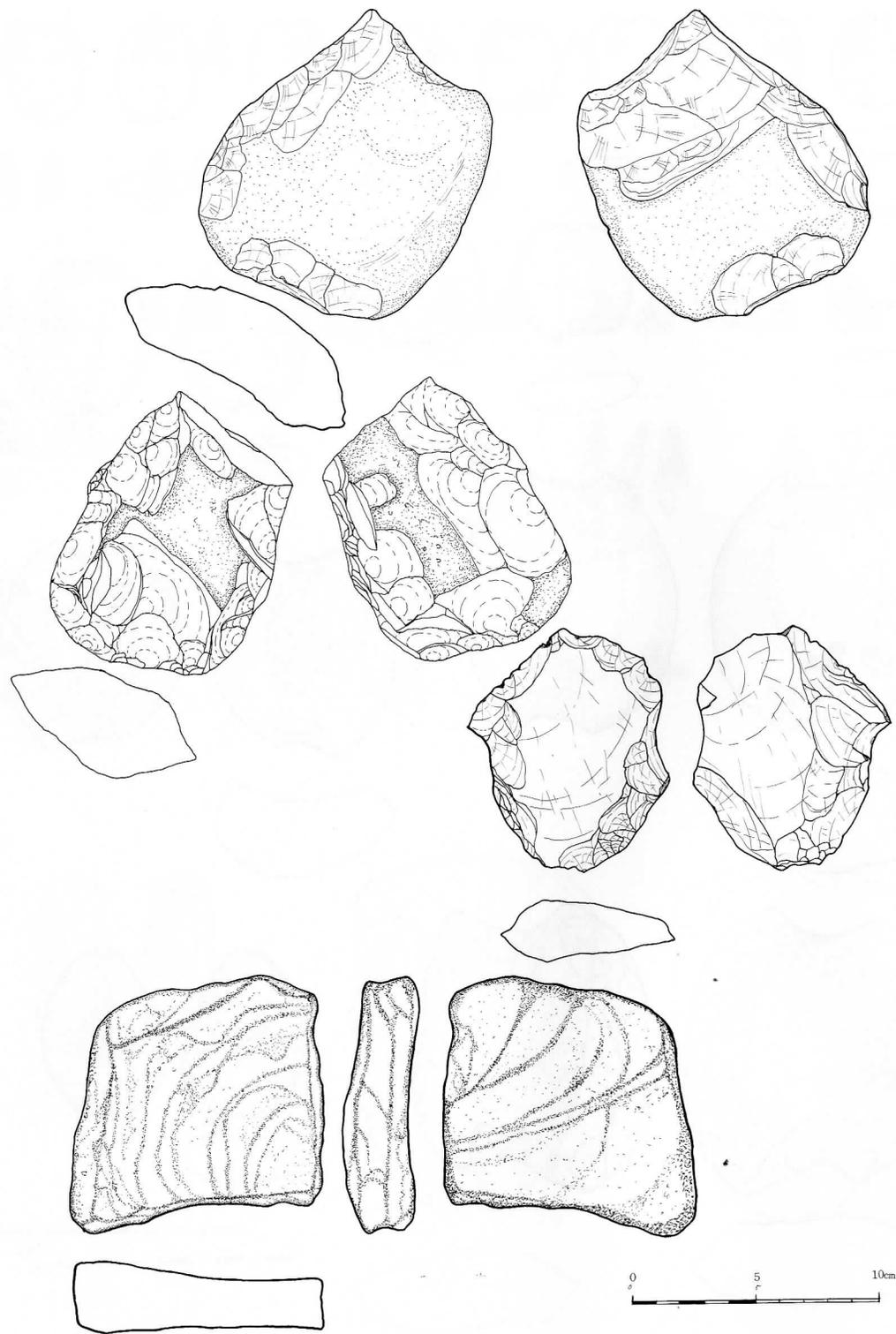




第 12 図 石鏃、スクレパー、石匙、垂玉、石斧



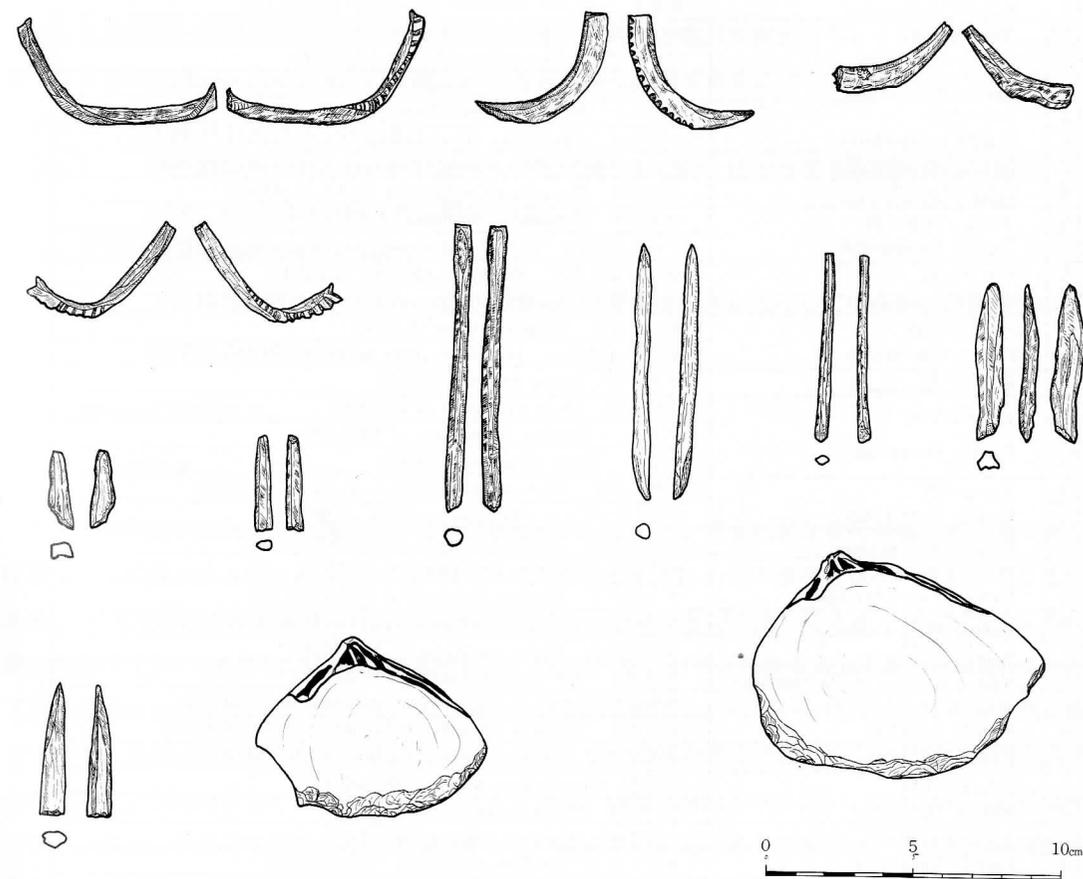
第 13 図 石錘、凹石



第14図 尖頭状礫器、サイドスクレパー、磨石

骨角器 骨針、骨鏃、骨ペラ、鹿角製ヘヤーピンの出土をみている。骨針、骨鏃、骨ペラ等は、普遍的にみられる資料であるが、鹿角製ヘヤーピンは類例のとぼしい資料である。図版に示したように、頭部の加工は龟头を形成しており、その先端の中央部に小孔を認める。首の部分 は両側から扁平に加工し、この部分の中央は小孔が貫通している。尖端までは、徐々に細くなめらかに磨きあげられており断面は丸い。九州での類例は、福岡県下の鐘ヶ崎貝塚があるが、南九州では出土例がなく本遺跡出土資料のうちでも優品といえよう。

貝製品 ベンケイガイ、またはタマガイ製の貝製腕輪の断片が数例出土している。加工それ自体は粗雑であるが、すべての面を磨き上げている。またハマグリ製の貝刃器も数例の出土をみている。



第15図 貝輪、骨針、貝刃器

第2節 自然遺物

貝類 貝類には、海産のものと陸産のものがある。これらのうち大量に出土しているのは、スガイ、インダタミ、レイシであり、次に示す一覧によってもあきらかのように外海性貝塚の性格を出土の貝類がよく示している。

海産貝類		
1		インダタミ <i>Monodonta labio</i> (LINNÉ)
2		コシダカガンガラ <i>Omphalius rusticm</i> (GMELIN)
3	にしきうず科	クボガイ <i>Chlorostoma lischkei</i> (TAPPARONE- CANEFRI)
4	Family Trochidae	バテイラ <i>Omphalius pfeifferi</i> (PHILIPPI)
5		ニシキウズ <i>Trochus maculatus</i> (LINNÉ)
6		サザエ <i>Turbo</i> (<i>Batillus</i>) <i>Cornutus</i> SOLANDER
7	ゆきのかさ科	マツバガイ(ウシノツメ) <i>Cellana nigrolineata</i> (REEVE)
8	Family Acmaeidae	ヨメガカサ(ヨメノサラ) <i>Cellana toreuma</i> (REEVE)
9	みみがい科(あわびがい類)	トコブシ(ナガレコ) <i>Sulculus supertexta</i> (LISCHKE)
10	Family Haliotidae	マダカアワビ <i>Notohalotis gigantea</i> (GMELIN)
11	りゅうてん科 Family Turkinidae	スガイ <i>Lunella coronata coreensis</i> (RE'CLUZ)
12	あますぶね科	カノユガイ <i>Clithon sowerbianus</i> (RE'CLUZ)
13	Family Neritidae	アマオブネ <i>Theiostyra albicilla</i> (LINNÉ)
14	むかでがい科 Family Rermetidae	オオヘビガイ(マガリ) <i>Serpulorbis imbricatus</i> (DUNKER)
15	うみにな科	ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)
16	Family patamididae	ヘナタリ <i>Cerithidea</i> (<i>Cerithideopsis</i>) <i>Cingulata</i> (GMELIN)
17	たけのこかにもり科 Family Cerithiidae	カニモリガイ <i>Rhinoclavis</i> (<i>Proclava</i>) <i>koihi</i> (PHILIPPI)
18	いとかけがい科 Family Epitonidae	セキモリ <i>Papyriscala bifasciata</i> KIRA et HAEB)
19	すいしょうがい科	マキガイ <i>Conomurex luhuanus</i> (LINNÉ)
20	Family Strombidae	フドロ(マルソデガイ) <i>Dolomena marginata robusta</i> (SOWERBY)
21	たまがいの科	マンジュウガイ <i>Polinices albumen</i> (LINNÉ)
22	Family Naticidae	ツメタガイ <i>Neverita</i> (<i>Glossaulax</i>) <i>didyma</i> (RÖDING)
23	たからがい科	タルダカラ <i>Talparia talpa</i> (LINNÉ)
24	Family Cypraeidae	ヤクジマダカラ <i>Arabica arabica asiatica</i> (SCHILDER)
25	おきにし科 Family Bursidae	オキニシ <i>Bursa dunkeri</i> (KIRA)
26	あつきがい科	イボニシ <i>Thais clavigere</i> (KÜSTER)
27	Family Muricidae	アカニシ <i>Rapana thomasiana</i> (CROSSE)
28		レイシ <i>Thais bronni</i> (DUNKER)
29	えぞばい科	ミクリガイ <i>Siphonalia Cassidariaeformis</i> (REEVE)
30	Family Buccinidae	バイ(シマバイ) <i>Babylonia pollida</i> (KIRA)
31	むしろがい科 Family Nassariidae	ムシロガイ <i>Niotha livescens</i> (PHILIPPI)
32	いとまきぼら科	ナガニシ <i>Fusinus perplexus</i> (A.ADAMS)
33	Family Fascioliariidae	チトセボラ <i>Fusinus nicobaricus</i> (LAMARCK)
34	てんぐにし科 Family Busyconidae	テングニシ <i>Pugilina</i> (<i>Hemifusus</i>) <i>ternataus</i> (GMELIN)
35	まくらがい科 Family Olividae	マクラガイ <i>Oliva mustelina</i> (LAMARCK)
36	つのがい科 掘足綱class Family Dentaliidae, scaphopoda	ツノガイ <i>Antalis weinkauffi</i> (DUNKER)
37	ふねがい科	サルボウ <i>Anadara</i> (<i>Scapharca</i>) <i>subcrenatus</i> (LISCHKE)
38	Family Arcidae	アカガイ <i>Anadara</i> (<i>Scapharca</i>) <i>broughtonii</i> (SCHRENCK)
39	いたやがい科 Family pectinidae	イタヤガイ <i>Pecten</i> (<i>Notovalea</i>) <i>albicans</i> (SCHRÖTER)
40	いたぼがき科	マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)
41	Family Ostreidae	イワガキ <i>Crassostrea nippona</i> (SEKI)
42	まるすだれがい科	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (RÖDING)
43	Family Veneridae	オキシジミ <i>Cyclina arientalis</i> (SOWERBY)
44	まてがい科 Family Solenidae	マテガイ(カミソリガイ) <i>Solen scricus</i> (GOVLD)
陸産貝類		
1	きせるもどき科 Family Solenidae	キセルモドキ <i>Mirus reiniana</i> (KOBELY)
2	やまたにし科 Family Cyclophoridae	アズキガイ <i>Pupinella</i> (<i>Pupinopsis</i>) <i>sufa</i> (SOWERBY)

表 1. 松添貝塚出土貝類一覧表

獣類 シカ、イノシシ、アナグマ、イヌ、ウサギなどが出土しているが、もともと多いのは、シカ、イノシシである。なお犬の埋葬例はさきに触れた通りであり、犬の糞石とともに宮崎県下での最初の出土例である。海産の獣類では、クジラ、イルカ類が出土しており、大型の肩胛骨や肋骨では、たち割った際の痕跡が認められている。

魚類 クロダイ、インダイ、スズキ、ブリ、マグロ、ベラ、フグ、エイなどが出土しているが、魚種不明の細片が多く、此後の検討がのぞまれる。以上の自然遺物の他、海産で注意されてよいのはアカウミガメとムラサキウニであって、特に、後者の出土量は多い。

第五章 人 骨

本人骨群は同一層中に獣骨と共に散乱し、しかも夫々可成り離れて出土した。これ等を採取、接着し得べきものは一括し、次の如き番号を施した。骨質は総て堅牢である。

- No. 1. 前頭骨右半部の大部分。
- No. 2. Bregmaを一隅とし、矢状縫合及び冠状縫合の左の一部を有する左頭頂骨の一部で、一辺41mm、他辺48mmの略々長方形の一破片。
- No. 3. 後頭骨鱗の大部分の破片。
- No. 4. 下顎骨骨体部の大部分と、この歯槽部に釘植する歯牙が残存しているが、前歯数本は死後脱落している。

以上につきて概説する。

No. 1. 前頭骨

本人骨は鼻部、眼窩面の大部分及び眉間が破壊消失している。最も顕著なる所見は、成人骨であるのに前頭縫合の残存せる事である。これは縄文人にも現代日本人にも余り屢々ではないが見られるものである。R. Martin氏の教科書(1928)の計測項目によってその数値を出してみると(以下同様) Nr. 9. 最小前頭幅102mm(推定Nr. 10. 最大前頭幅120mm(推定)で、前者は可成り大である。Nasionが失われているので詳かではないが、正中矢状前頭弦長も、弧長も余り大ではない。前頭結節は可成り強く膨隆している。眉間の部分は、少しく突出していたと思うが、眉弓の発達は弱く短い。左右眉弓の最突出点を結ぶと、眉間は少しくこの線より低いようである。眼窩上縁は水平に近い。露出せる前頭洞は狭小である。以上、骨全体の性状よりして女性骨らしい点が多い。冠状縫合の癒着は、内外板共に開始せぬらしく、成人ではあるが、余り老年期のものではない。前頭骨頬骨突起は側頭線の出発点になるが、この部分が少しく変っており、既にこの部分で、上、下側頭線が完全に分離している。この形質は可成り稀なものである。

以上の事実より本前頭骨は成年期以上余り老年期に至らざる女性骨と考えられ、少しく中頭型より長頭型に傾くと考えられる節がある。

No. 2. 左側頭骨骨片

本骨片は頑丈で厚く、矢状、冠状縫合の癒着は、少くとも外板においては開始しないらしく、且つ、No. 1. 人骨とは、接着し得ないが個体の異なる事は明確である。頭頂粗性が見られ、内面には動脈溝が見られる。以上の事から、どうも男性らしいが、小破片なる為不明。余り老年とは思えない。

No. 3. 後頭骨鱗部

小破片となっているが接着し得た。Nr. 12. 最大後頭幅114mm、Nr. 28(4)、後頭骨正中矢状上鱗弧長75mm、Nr. 31(4)、同上弦長72mmで総て可成り大きな値をとっている。全体として可成り頑丈で且つ厚い。Inionの突出は余り強くはなくBroca氏の第2度である。外面の筋附着面の粗糙は強い。後頭平面の彎曲は少しく見られるも、項平面は平坦である。外後頭稜は彎曲している。各項線の発達悪く、辛じて最上項線を見るばかりで、他は著明ではない。上、下後頭窩は深く、内後頭隆起は突出強し。人字縫合の外板は殆ど癒着を開始せず、内板若し癒合が開始していても極めて軽度である。本人骨は恐らく男性であろう。そして成人ではあるが余り老年ではない。何か少しく中頭型より短頭型に近い頭蓋の様に見える。

No. 4. 下顎骨骨体部

本下顎骨は極めて頑強である。正中矢状面近くで2分されているが、破損部あるも接着し得た。両側共に下顎枝が無い。Nr. 51. 頤幅51mm、Nr. 69(1)、下顎体高(右) 34mm、Nr. 69(3)、下顎体厚14mmで可成り大きい値をとる。頤隆起、頤結節の発達はよくなく、頤三角は著明ではない。即ち、頤部の発達は良好とは言えず、頤の前方突出は弱い。頤孔は第2小白歯と第1大白歯間の下部にあり、左側は上下の略々中央部にあるが、右側の方が少しく下方に移る。位置も大きさも左右非対称である。斜線の発達極めて良好、従って、大白歯の歯槽部が左右側共に内側に突入し、歯列弓の形態は拋物線をなすのに、骨底は双曲線の一部に近い。次に内面では、頤棘はあるが、左右非対称である。二腹筋窩も深いがこれ又左右が同一でない。舌下腺窩は浅く、顎舌骨筋線は粗糙が強い。以上の所見により男性の下顎骨である事は明かである。右側第1第2小白歯歯槽部に、それより前後に伸びる2個の小丘状の連続せる下顎隆起を認める。

次に歯牙を見ると、右第1、第2門歯、左側では第1門歯より犬歯に至るまで死後脱落しており、抜歯の風習による抜去ではない。咬耗度を見ると、Broca氏の第2度より第4度に及んでおり、第2度を示すものは第3大白歯のみで、他は極めて高度である。概ね水平に用耗し、鉗子咬合である事は歴然としている。前歯部が脱落しているので明確ではないが、咬合線は左右側第1門歯、左右側第1大白歯を最陥凹点とする3つの波状の陥没が見られる。これ縄文人によく見られる用耗様式で、上顎歯牙が存在すれば必ずや下顎のそれと反対の用耗を示すことは必定で、上顎歯牙と下顎のそれとはその間に大なる間隙を作ることなく咬合するものである。右第3大白歯頰側面に高度の齶歯を認める。

但し、可成り固い物を噛んで、歯牙を道具に用いたとは考えられ、その為に歯根部にまで用耗が及んでいる。歯牙を水平に切断せるや否や不明であるが、本人骨のみならず、縄文人の大部分が余りにも用耗されているところを見ると、何か切断も一応考慮に入れる必要がある。これには一層の精査の上決定する必要を感じる。本下顎骨は熟年期のものと考えてよいであろう。

以上4個の人骨破片について論じたのであるが、どれがどの個体に属するかは明確ではないが、No. 1とNo. 2は同一個体ではない。No. 2 No. 3 No. 4が同一個体と考えてよいかも知れぬが、その確証はない。No. 1は女性骨らしく、他は男性と思われるものもあるので、結局2体乃至4体分の人骨と考えなければならぬであろう。推定年令も、下顎骨は熟年期のものとするのが適当であり、他は成年より余り老年期に入らざる年令であると言う以外には確定不能である。

本人骨群は頭蓋の破片のみで、胴、四肢骨は見当らない。この人達の胴、四肢骨は何処にあるか、これに関して松戸市子和漬水貝塚(加曾利E式並行)に2体、宮戸島袖ヶ窪貝塚堀ノ内式並行に1体全く頭蓋がなく、胴、四肢骨は仰臥位をとり、且つ全く攪乱のない人骨を経験している。これ等は、本人骨群と全く対蹠的である事が興味深い。この辺に何か解決の糸口があるかも知れない。又、本人骨群は他獣骨と同様な取扱ひを受けて散乱している。この事に関しても、食人の風習、埋葬されたものが偶然の機会に出土して散乱人骨となったかの両者が考えられるが、このいづれかに決定するには時日を要しよう。

以上を総括するに、

- 1) 本人骨群は2体乃至4体分あり、成年より余り老年に入らざる人達である。女性が1体あり、他は男性の様に思われる。
- 2) 女性と思われる前頭骨には前頭縫合残存し、男性の頑丈な下顎骨は鉗子咬合型であり、抜歯の風習はない。
- 3) 頭蓋破片のみ散乱している理由は目下不詳である。

第6章 考察

土器を中心として、本遺跡の出土資料を検討するとき、さきに触れた貝殻文土器の南九州における編年の位置がまず検討されねばならない。従来知られている南九州の貝殻文土器は、早期の石坂式、前期の吉田式、前平式、塞ノ神式、中期の並木式、岩崎下層式、後期の岩崎上層式、綾式、指宿式、下弓田式、市木式、草野式など、早期から後期まで、土着の土器として、一連の系譜をたどることが出来るが、これらの出自についての検討や、その終末の状況については、多くの問題を残しているところであった。早期の石坂式もその位置は、後半よりさかのぼることは出来ず、押型文土器との関係について明確さを欠いている状態である。轟貝塚の下層より検出されている条痕地の尖底土器は、鹿児島県下でも出土例が増しつつあるとはいえ、その共判関係や押型文土器との層位関係が十分に確認されている例はなく問題を残していることはあきらかである。押型文土器についての研究はかなり進展しているが、貝殻条痕文との関係については将来の発掘例をまたねばならない状況にある。ただ押型文土器のうち尖底土器について云えば、尖底という器形上の特徴を無視することは出来ず、この器形を重視するかぎり、貝殻文を有する尖底土器としての政所式の存在には注意せねばならない。政所式が吉田式に先行することは、十分に考えられるところであるが、これとて層位的な保障が発掘調査によって得られていない。したがって貝殻文系土器の出自については、なお検討されねばならないわけである。

一方、貝殻文系土器の南九州における終末を後期後半以後の状況についてみると、く字形口縁のよく発達した市来式土器から、その退化形式として、く字形口縁が姿を消し、単に口縁部を肥厚させるにすぎない草野式へと推移していることは、層位的にも確認されることである。このことは、磨消縄文土器との共伴関係においても、綾式に共伴する福田KⅡ式をはじめ、指宿式に伴う鐘ヶ崎式、西平式の磨消縄文土器が市木式に伴う西平式を最後に草野式に至って共伴しなくなる状況に対応している。したがって装飾施文としての貝殻文が市来式を1つのピークとして退化していくのに伴って、磨消縄文との共伴関係もみられなくなるのであって、縄文ころがしによる施文技法の退化に並行して貝殻文のすい微がみられることになる。

一方、縄文ころがしの技法、これを1つの縄文文化のトラディションとするとき、西日本においては、晩期に入って急激にこのトラディショナルな技法が消滅して、それに代って無文化され黒色磨研の精製土器によって代表される一群の土器が出現してくる。瀬戸内における黒土式、九州における御領式の系譜上にある大石式、黒川式である。黒川式は単純に黒色磨研の精製土器を主体としており、共伴関係にある貝殻文土器は皆無である。

以上のことを基礎に、本遺跡の土器群を検討すると、下層から出土した西平Ⅱ式にしても、縄文ころがしの技法がすでに失われている時期であり、その上層から出土した貝殻文土器伴出の黒色磨研の精製土器は、無文化の著しい資料であってみれば、施文技法の点からも新しく展開する文化的な様相をうかがうことの出来る資料といえる。無文化された黒色磨研の精製土器の出現が縄文ころがしの伝統的な施文技法にとって代った瀬戸内の様相や、北部九州の状況に対比して、市木式から草野式への展開の延長線上にある一群の貝殻文土器を共伴して出土した本遺跡の状況は、まさに地域的な性格を示すものであって、土器文化にあらわれた地域性を示すものであろう。本遺跡出土の黒色磨研精製土器の一群が、

本県出土の黒色磨研精製土器のうち最古の資料であることは考えられないのであって、このことから南九州の縄文文化は、土器を中心として考察するかぎり、貝殻文系土器の残存、すなわち縄文的なトラディションをより新しい時期まで残存させている点で特徴的である。これらのことは、南九州における縄文晩期の初頭に位置づけられる1群の土器として、本遺跡の資料を標式とする一形式の設定を妥当とする。さきに触れた黒色磨研の精製土器と特定された貝殻文土器の共伴関係にある組合せをもって、松添式として扱う所以である。

結 言

松添貝塚は以上に述べたごとく、その規模が大きいことがまず注目される貝塚で、東西98m南北128mという広い地域を占めてをり、貝層の厚さも1mに達するもので、県内では勿論最大のものであるが、南九州においても随一の大きさであると言ってよいであろう。この貝塚は後方に高さ100mないし200mの山を負い、前は日向灘に面してをり、目の前に青島があるが、青島は標高5.7mで貝塚の位置している土地の標高と同じくらいであるから、この貝塚が形成された時期には、恐らく波間に隠れたり出たりしていたのであろう。貝塚のある畑は背後の丘地に北と西と南の三方を囲まれた格好の土地で、上の畑より一段低い畑である。だから一段高い畑地に住居跡が幾つかあり、いわばここに部落があって、その部落の住民たちが食べ残りの貝殻や動物の骨などを捨てたものが貝塚となったのである。だからこの報告書は貝塚を調査した報告書ではあるが、実はこの貝塚を作った上の畑に住んでいた住人たちの生活や行動や文化を報告しているのである。

それで上の畑を見ると、あまり広い土地ではないから、大部落があったとは思われない。しかしここは東を向いているから陽当たりがよく、海岸で岩が多いから魚介類は多いし、山を負っているから西風や北風を防いで住居の場としては適している。後方の山の向うには山や丘が続いていて狩猟にも適当な所が多い。だが台風はまともに受けたであろうが、山の向うに避難することもできたであろう。だからこの部落はあまり大きくはなかったとしても、部落の人たちは長くここに住んだであろうと思われる。このことは貝塚から縄文後期の貝殻文土器と研磨土器という縄文晩期の土器を伴出することや、貝塚の規模が大きいことなどがこれを物語るものと思われる。

さらにこの貝塚の底には大小の石が南北に長く石を敷いたように、連なっているがこれは海岸にある自然の石の列であろうと思われる。ここは天然記念物に指定されている隆起海床と奇形波蝕岩（俗に鬼の洗濯岩）のあるところであるから、その基盤の砂岩と頁岩の互層のうち頁岩の層がこれであると思われる。そしてこの頁岩の層は貝塚の底、それは今の地表から1m以上下にあるのであるから、貝塚が形成され初めたころは、この石の層は地表に現われていたはずである。

上の畑の住人たちは、なにも貝塚を造ろうと思ってやったのではない。部部の申合せでもあって、やたらに食べかすを棄てると、蠅がたかたり、ウジ虫が発生して汚ないから下の海岸に近い所に棄てようということ、低い土地に投げずての方が都合がよいのでみんな低いところに棄てたのが積って塚と

なったわけである。この貝塚のある畑は標高5.5mから7.3mであるから、それから1m余り低い頁岩の層は、ひよっとすると、そのころは波に上を洗われていたかも知れないし、また波は来ていなかったとしても、海岸の汀線からあまり遠い距離ではなかったであろうと思われる。それなのに上の畑に住んでいた人たちが低いところに投げ棄てた貝殻や獣の頭や魚の尻尾や骨などが積み積って1mにもなった間に、海岸は次第に沖に退ぞいて行ったのである。だからこの貝塚が形成されるには相当に長い年月が経ったことを推測することができるのである。

この貝塚から発掘された遺物は自然遺物と人工遺物に区別されるが、自然遺物はこの貝塚を形成した人々の食べたものがほとんどで前に記されている陸棲動物、海棲動物といろいろあるが、特にこの貝塚では貝類が多い。これは岩場の磯が多く、これらの貝類は女や児童でも容易に捕り得るからで、男は狩りや漁に出たのである。もちろんこのほかに自然の木の実や果実、草根や海草も食べたが、それらは後に残らない。特に犬が埋葬されていたことは、すでに家畜としての犬が飼われていたことを示すものとして注目される。また海棲動物のうちウニの殻まであるのにカニとエビの殻が見出だされなかったことは、青島附近がエビの産地であることから不思議な感じがする。人工遺物は道具が主である。土器は物を煮たり、水を容れたり、物を入れたりするもので、焼きと文様の異なる二種類があり、文様では蝶ネクタイ形の模様をつけているものが特徴的である。石器は物を造ったり木を伐ったりする石斧、網のオモリに用いる石鍾、矢の先につけて狩りに用いる石鏃など生活上に必要な道具が多いが、垂玉のように装身具もある。また貝や動物の骨で作った貝ナイフや縫針などのほか腕にはめる貝釧もあった。また配石遺構に近いような石の配置や大きい石の下に鹿の骨があって、この時代の人の信仰を示すかのようなものもあったが、明らかにするまでには至らなかった。

このようにこの調査では多くの得るところがあったが、これらによってこの遺跡は学問上に極めて重要なものであることが知られたが、われわれは調査期日が限られていた関係もあって、その一部分を掘ったのみで、発掘地点でも多くを残して置いた。従ってここにはまだ貝塚が立派に残っているのである。しかし青島は市の目玉的な観光地であるから何時開発の手が伸びて、これを破壊し去るかも知れないのである。それで今のうちに早く保存の方法が講ぜられることを期待して已まない次第である。

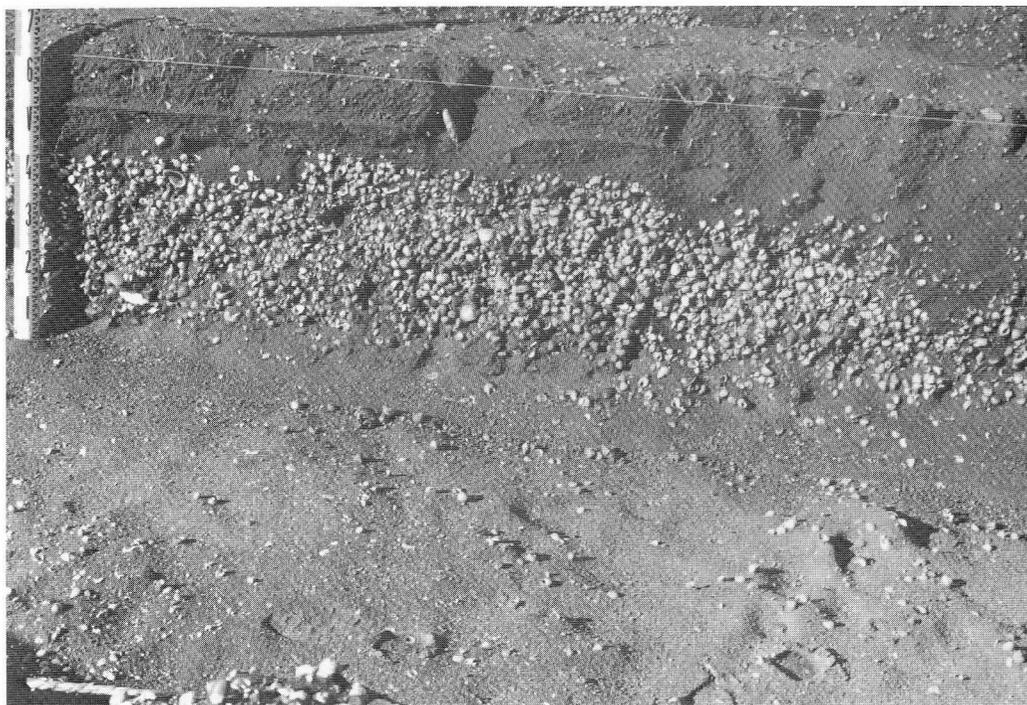
図 版



図版(1) 遺跡遠景



図版(2) A・B区の発掘風景



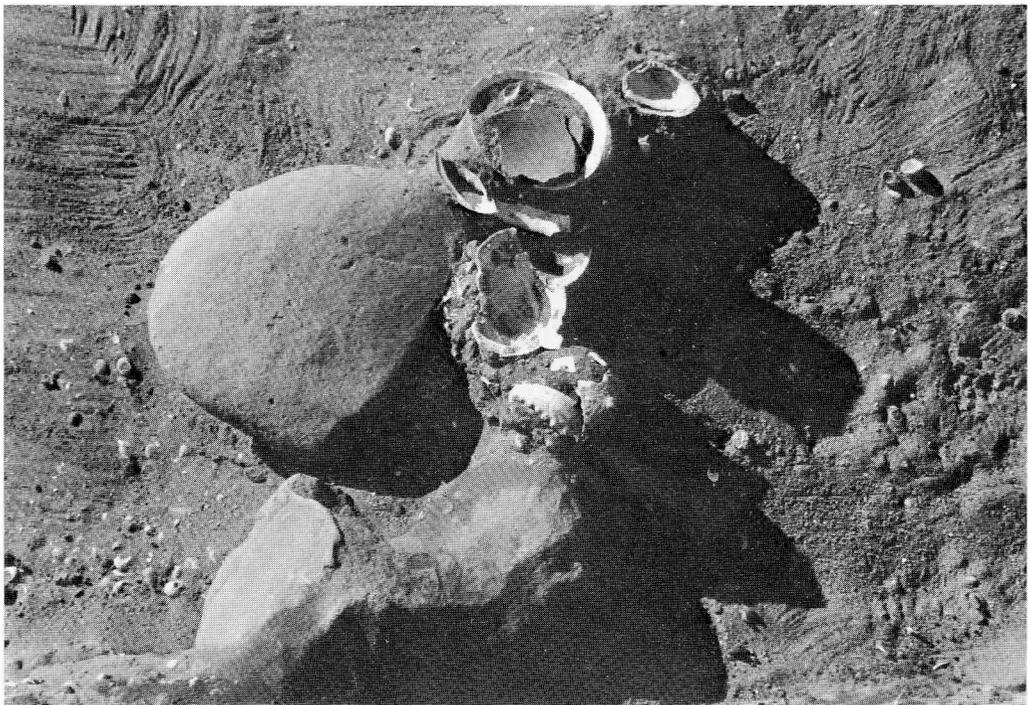
図版(3) B区 貝石状態



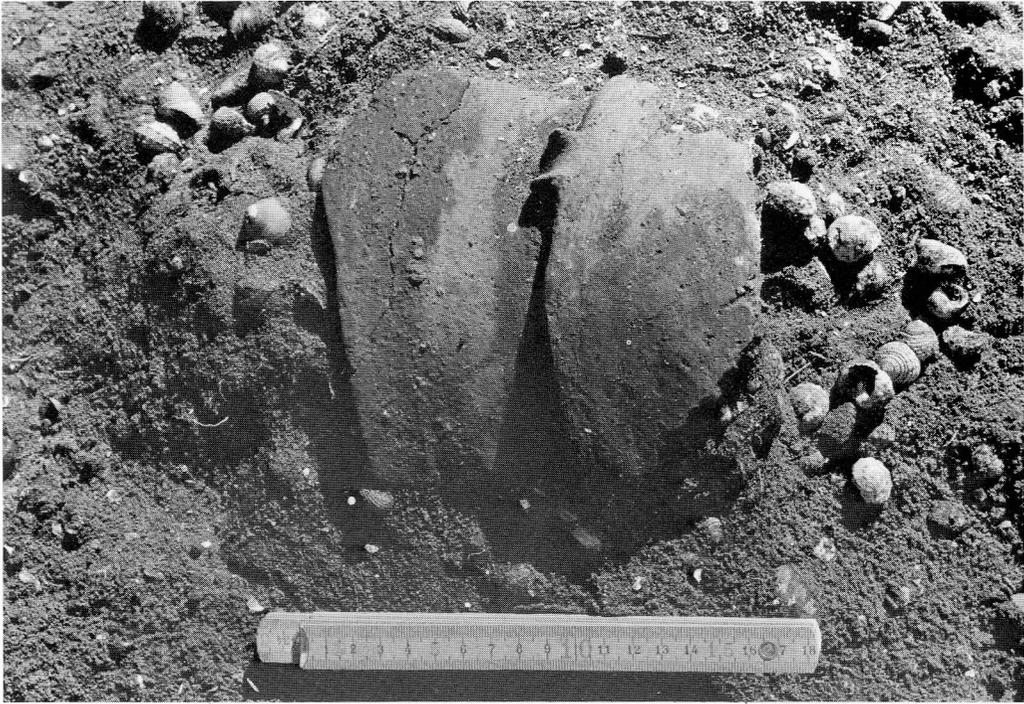
図版(4) B区 土層



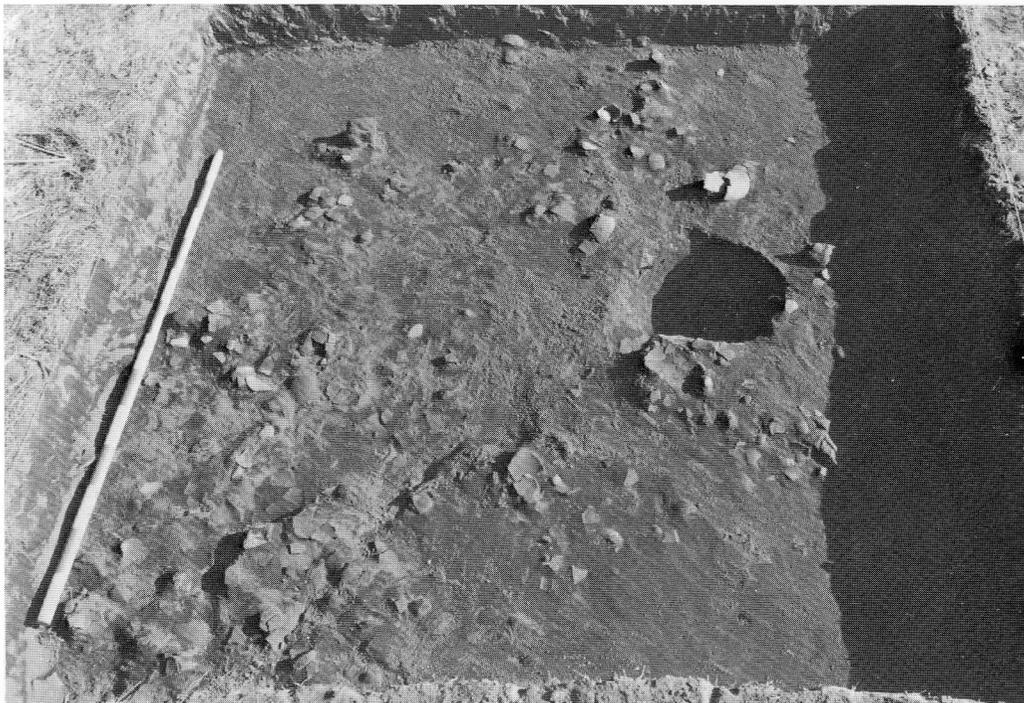
図版(5) 埋葬状態で出土した犬



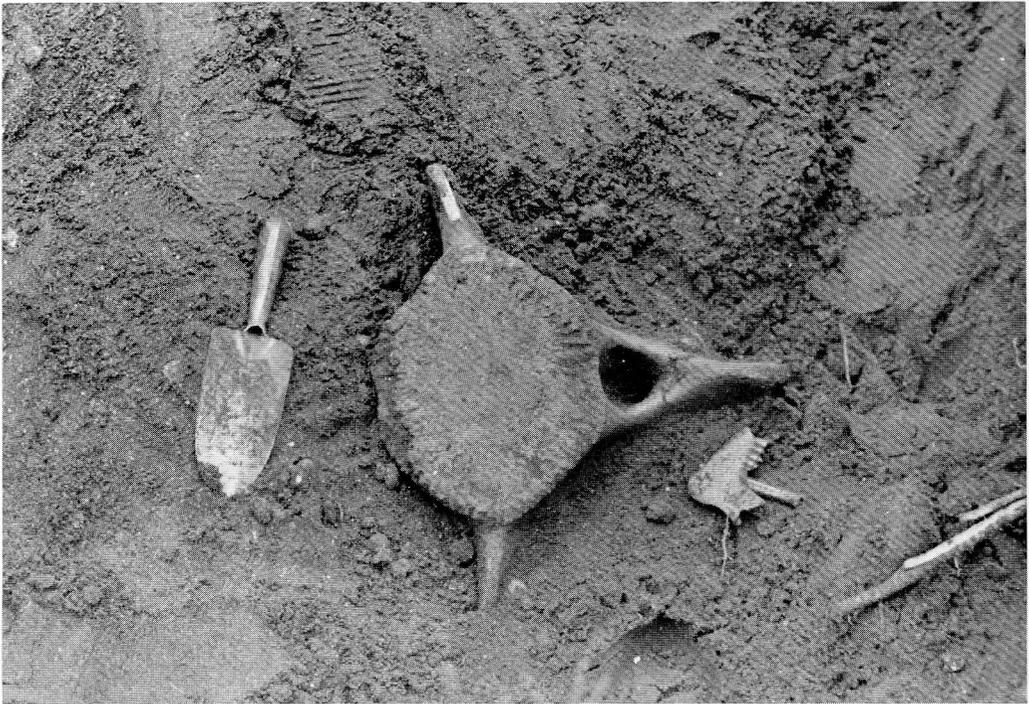
図版(6) B区検出石蓋土抔



図版(7) A区土器の出土状況



図版(8) C区包含層上面の出土状況



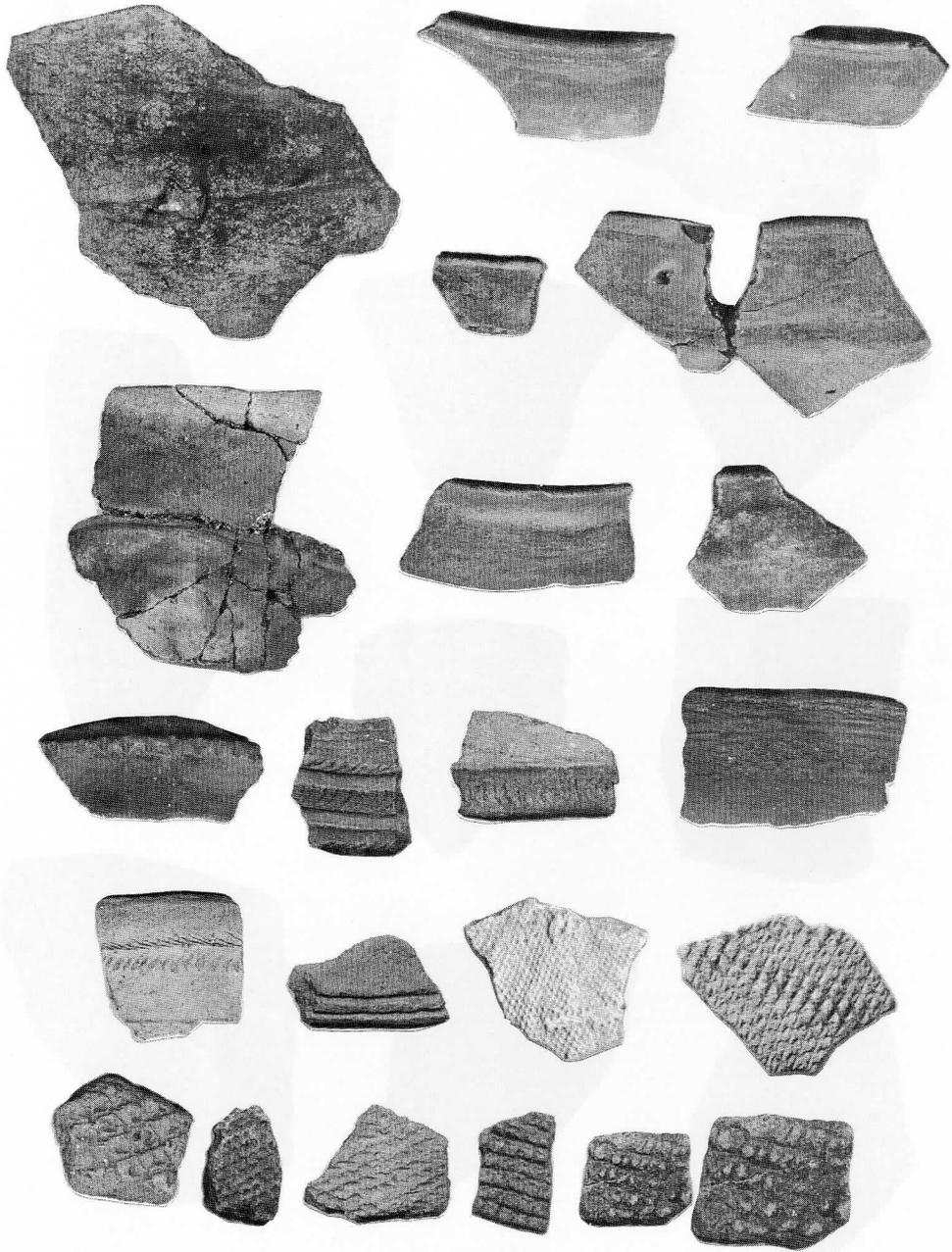
図版(9) 鯨骨の出土状況



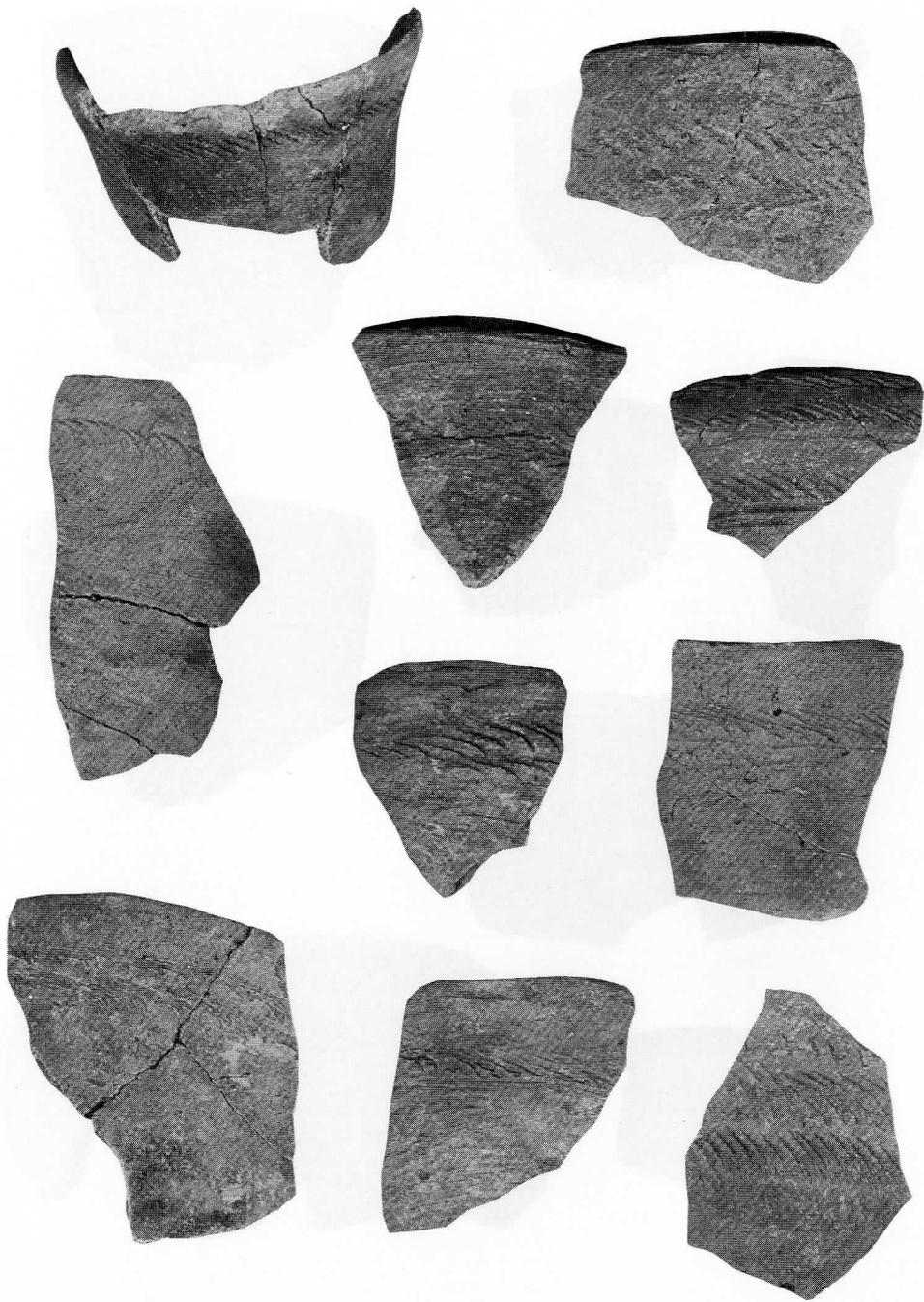
図版(10) 鯨骨の出土状況



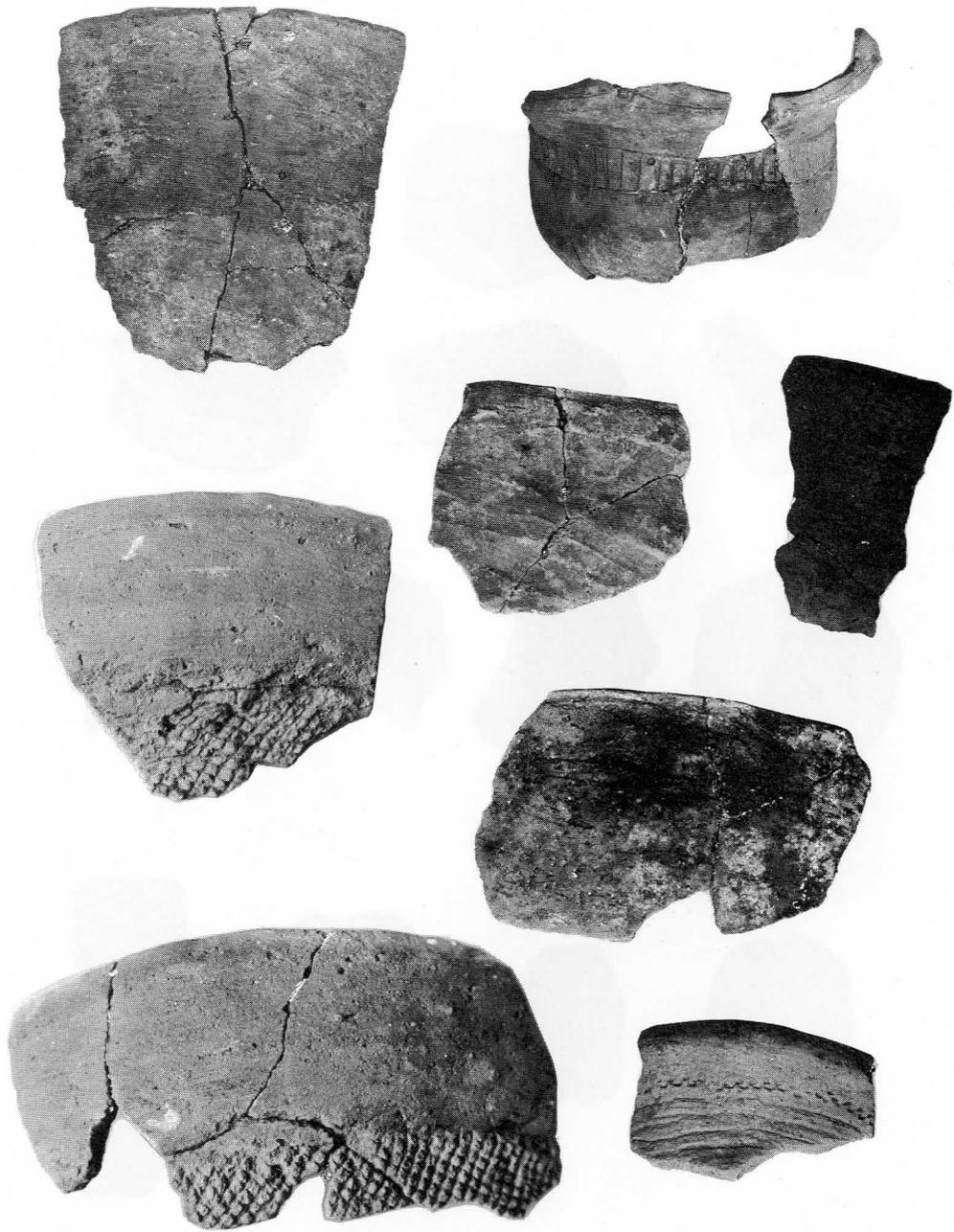
図版(1) 出土の土器



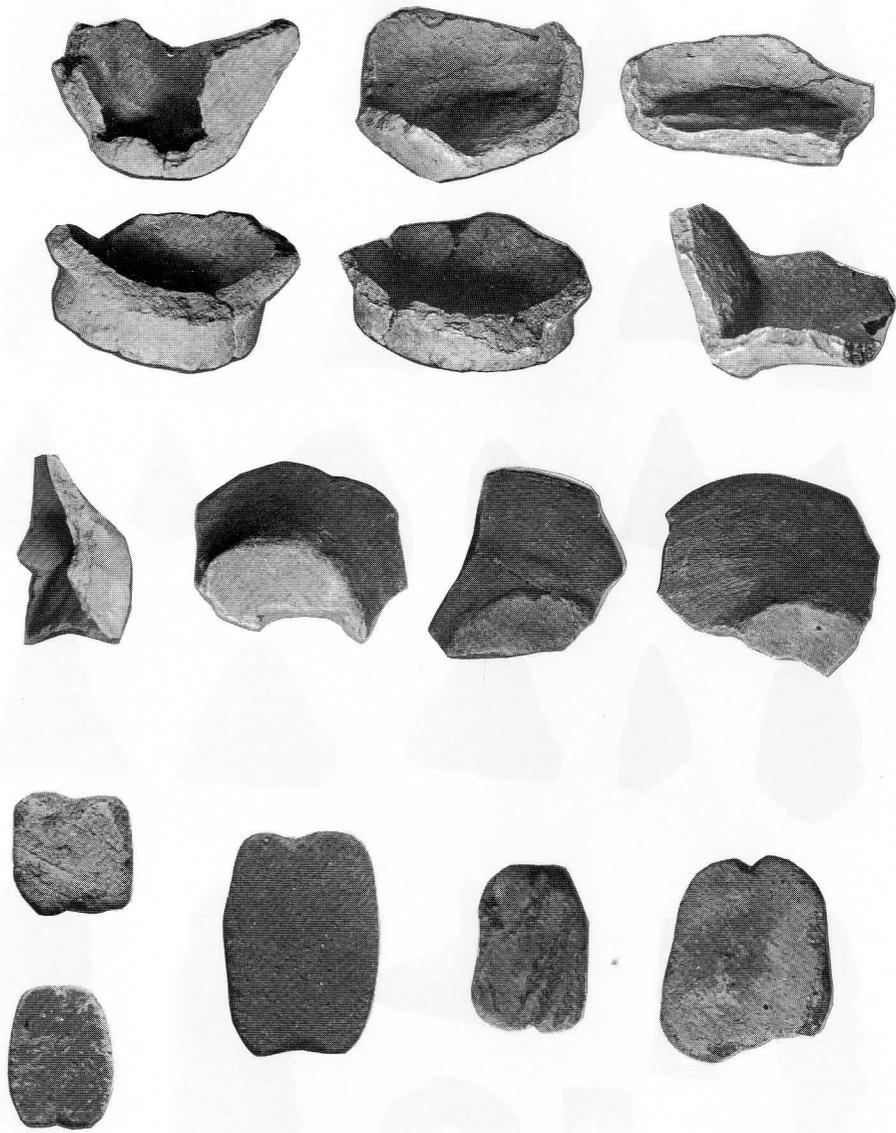
図版(12) 出土の土器



図版(13) 出土の土器



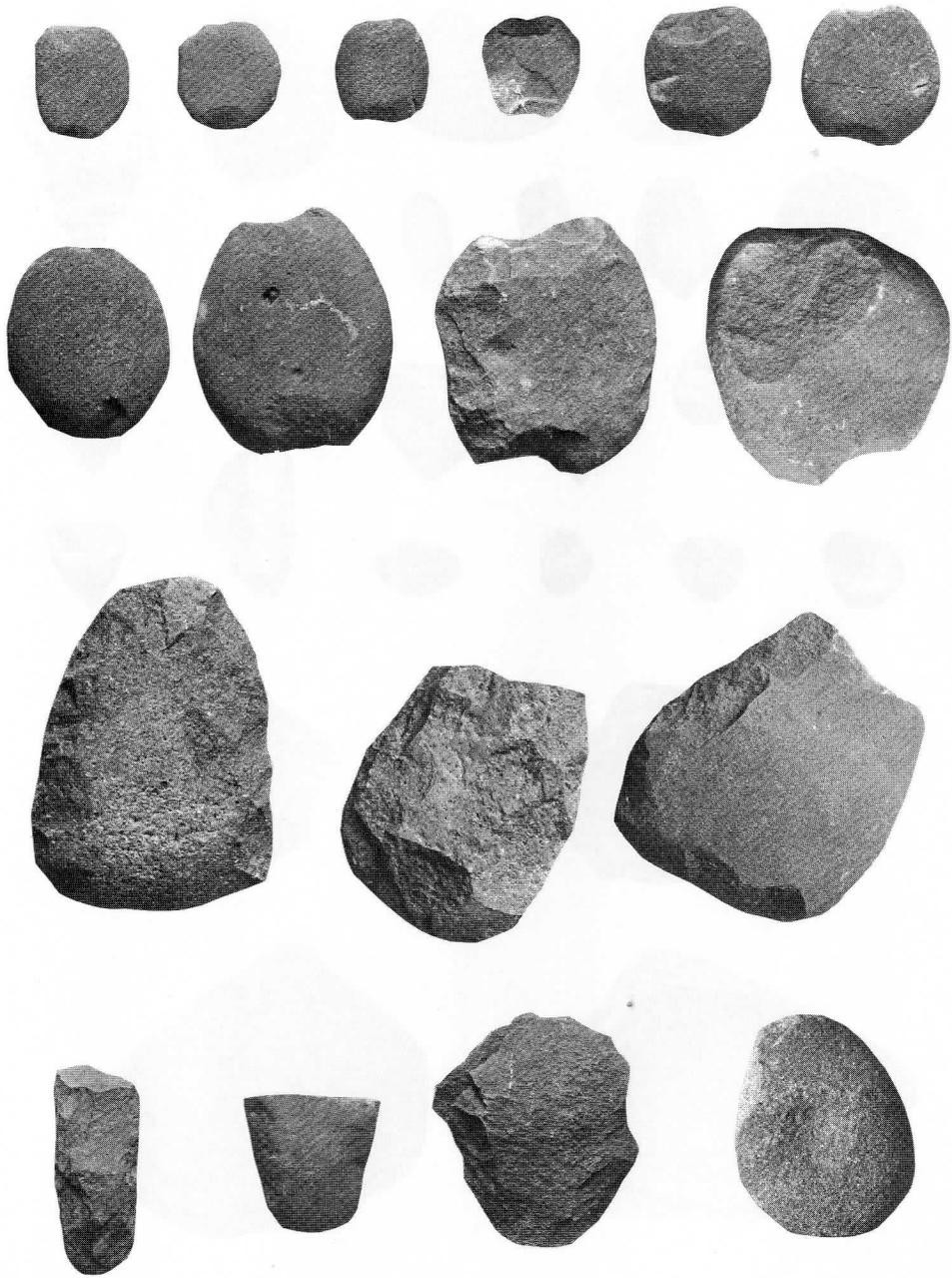
図版(14) 出土の土器



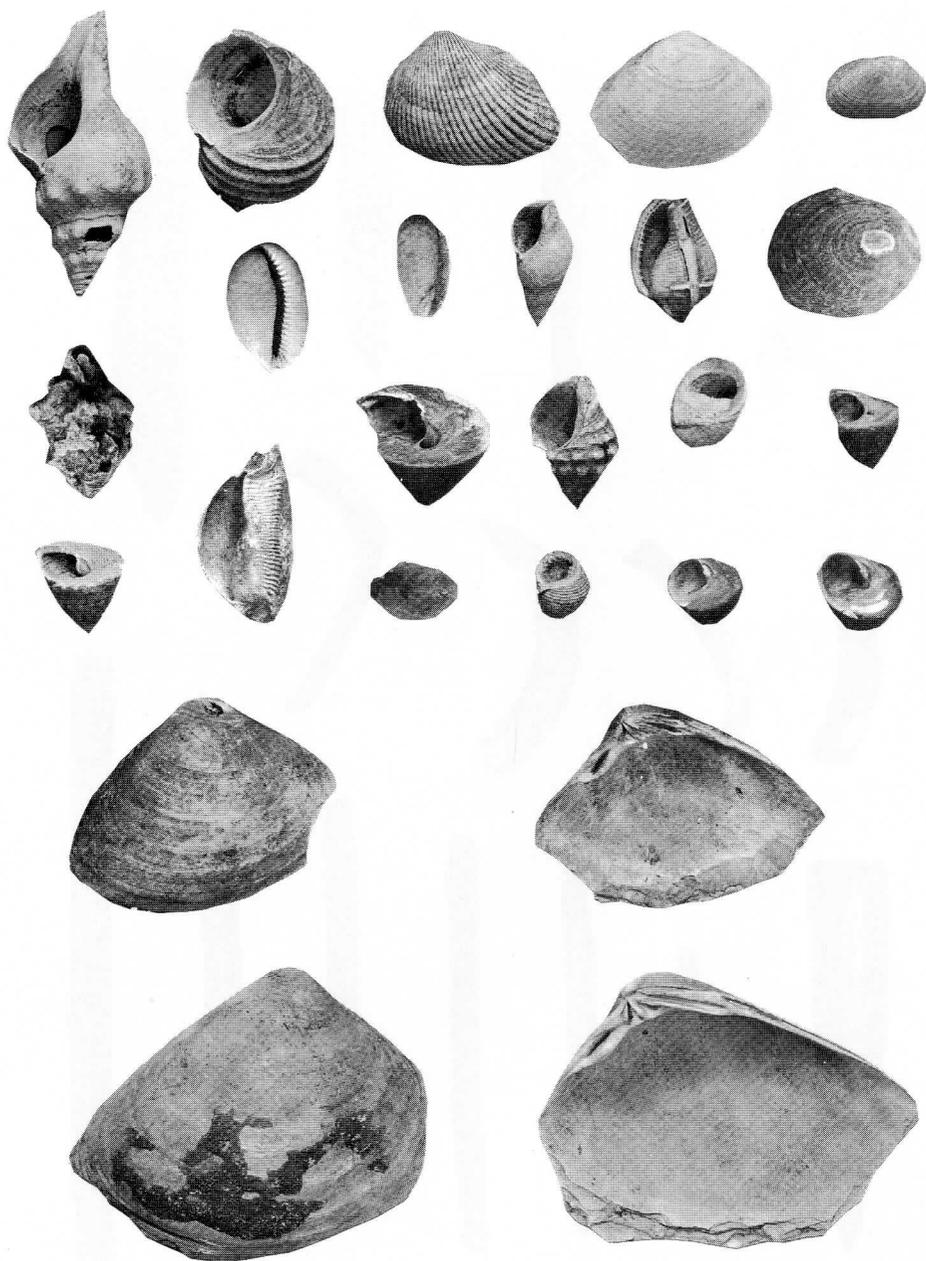
図版(15) 土器底部及び土石垂



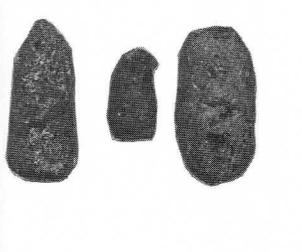
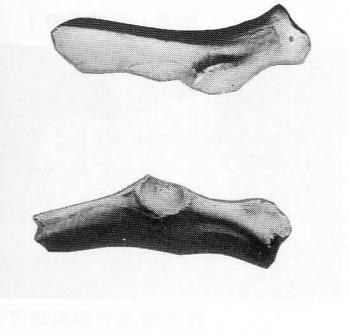
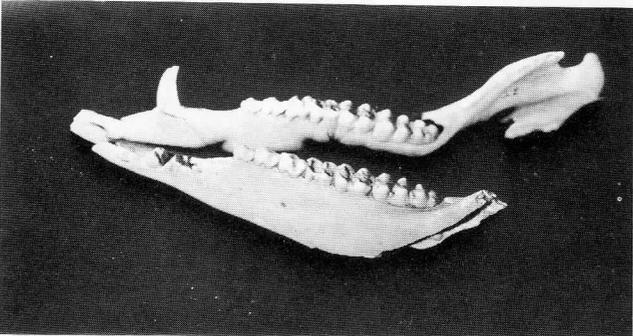
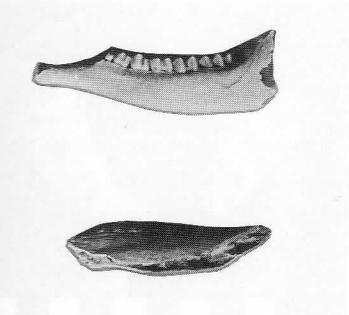
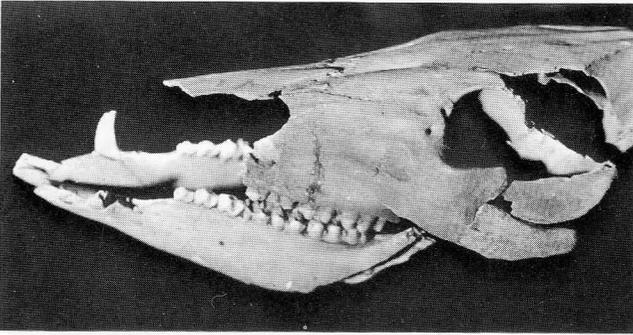
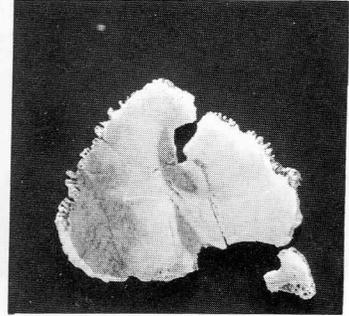
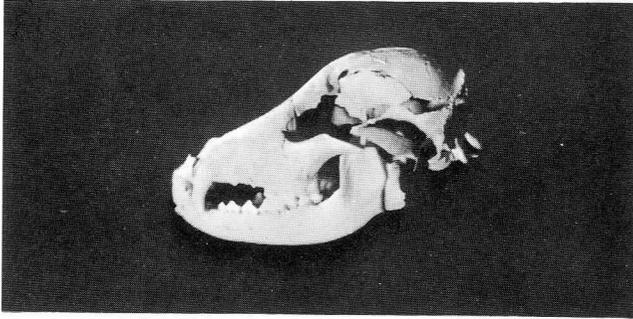
図版(16) 石鏃・石匙・スクレパー・垂玉



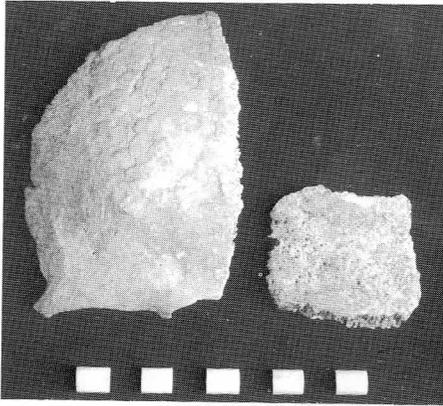
图版(17) 石石垂·石斧·尖頭状礫器·凹石



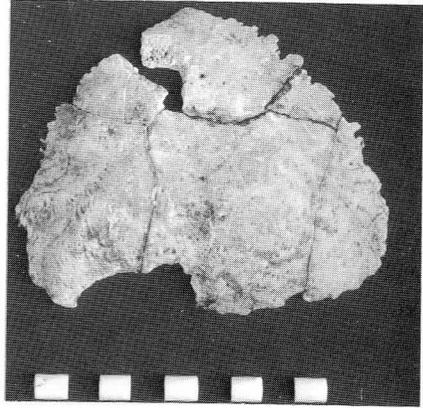
図版18 出土の貝類及び貝刃器



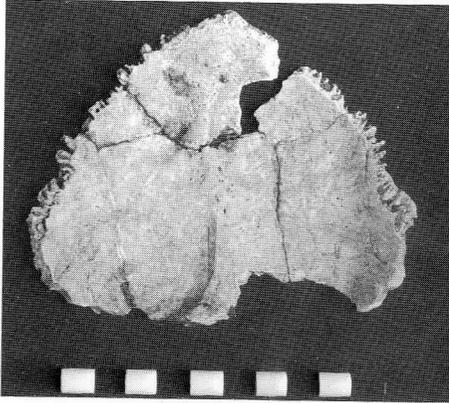
図版20 犬・イノシシ・鹿及び犬の糞石



前頭骨及び左頭頂骨破片
外面 (目盛は 1 cm)



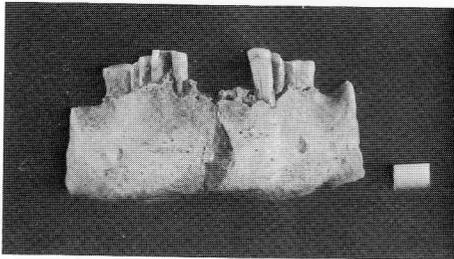
後頭骨破片外面



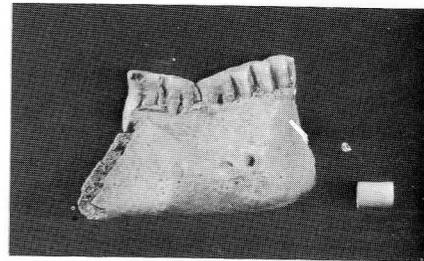
後頭骨破片内面



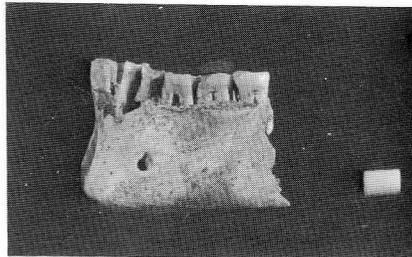
下顎骨破片上面観



下顎骨破片前面観



下顎骨破片右側面観
註：歯牙咬合線の波状を示す



下顎骨破片左側面観

調 査 団 の 組 織

調 査 主 体	宮崎市教育委員会
調 査 員	石 川 恒太郎 (文化財専門委員)
	鈴 木 重 治 (南九州大学助教授)
	安 楽 勉 (宮崎高等学校教諭)
参 与	小 片 保 (新潟大学医学部教授)
調 査 補 助 員	和 田 利 徳 (別府大学生)
	松 井 孝 之 ()
	平之内 幸 治 ()
	川 信 修 治 (南九州大学生)
	田ノ上 哲 (宮崎大学生)
協 力	坂 田 邦 洋 (長崎大学医学部助手)
	宮崎高等学校郷土史クラブ
事 務 局	宮崎市教育委員会教育課
	課長 曾 根 敏 陽
	補佐 小 田 実
	主事 野 間 重 孝 (発掘現場担当)

松添遺跡発掘調査報告書

昭和49年3月31日 発行

編集・発行 宮崎市教育委員会

印刷 赤沢印刷株式会社

宮崎市大工町142

